
金より大切なものの

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金より大切なものの

【Zコード】

N8102F

【作者名】

流星

【あらすじ】

信用金庫に入社し、社会人となつた伊藤信治。金でなんでも手に入るこの時代で、彼はお金よりも大事なものを探している。だが世の中そうはうまくいかず、むしろ金がなければ生きていけない現実が彼の心を変えていく。『金より大切なものの』は見つかるのか。そして、本当にそなものはあるのだろうか。

第一話・始まり

世の中金で動いている。

金があれば何でもできる。

金が無ければ何もできない。

子供の頃、それはウソだと思っていた。

大人になつたら、金より大事なものがあるよ、って証明したかった。

でも大人になるにつれ、逆にそれが確信に変わつていった。

金より大事なもの

愛？

友情？

命？

誰か教えてほしい。

金が無くとも幸せになれるのか。

金が無くとも毎日笑つていられるのか。

金なんか本当はいらないんだと、誰かに言つてほしかつた

「おはようございますー。」

今日からソニー、風間信用金庫で働く事になった伊藤信治。

彼は一週間の研修期間を終え、この駅前支店にやってきた。

研修中を思い出すと

「ハア。。」

なんだかため息が出る。

知らない顔が六人集まつての研修。

あの緊張感はなんだろう。

特に話をする間も無いまま始まり、広い会議室でバラバラに離れて座り、上司の難しい話を長々と聞いて。

でも一番緊張したのは食事の時だ！

食べる音の響くこと響くこと。

漬け物。

パリッ パリッ 。

味噌汁。

ズズズズズズズ 。

特にこの一つには氣を使った。

「あの空気は何だったのか。漬け物にあんな緊張したのは初めてだつたなあ。」

なぜかセンチな気持ちになる信治だった。

ともあれ今日が彼の初仕事なのだ。

まず朝店が開く前に出すコーヒーの入れ方を、一年先輩の草野さんが教えてくれた。

「みんなコーヒー カップ持つてきてるから、伊藤君も今度持ってきてね。今日はお客さん用のヤツ使って。」

「はい。」

「で これが支店長、これが次長で、このカワイイのが代理、似合わないでしょ？あと係長のと、長谷川さん、木下さん、野田さん、あと私のね。」

「はい。」

「それから次長、超甘口だから砂糖五つね。係長はブラック。木下さんと私は砂糖二つ。あとはみんな砂糖一つでいいから。あつ、それから遅いと野田さんに怒られるから気をつけてね。」

「はい。」

（なんかもう こんなところで早くも覚える気がしないよ まだ顔と名前も一致しないのに。）

彼の頭の中で、コーヒー カップがグルグル回っていた。

さて 八時半になると、いよいよ店が開いて本格的な仕事が始まつ

た。

信治は、とりあえず客に直接触れない真ん中の席に座り始めた。
ここで何をするかというと、伝票を機械で打つ作業だ。
コレは研修の時にやつた。

練習用なので、冗談で一千万円とか入金して遊んでたアレだ。

一万円入金するのを、間違つてのを一つ増やしてしまつと、客の通帳には十万円入金される事になる。

それが恐ろしくもあり、またなんだか面白くもあった。

伝票にはお金も付いてくる。もちろん研修の時に数える練習はしたが、練習用の偽札だつたし、五万、十万というリアルな金が目の前に来ると、妙にドキドキしてしまつ。

仕事は、何でもとは言えないだろうが、覚えたてが一番楽しいのである。

昼、数人ずつ一階の休憩室で昼食をとる。

信治がその日一緒だつたのは、木下さん。その支店の女性では一番年配の、とは言つてもまだ二十代の女性だ。

「伊藤君、だよね。名前は？四郎とか？」

「いや 信治です。」

「信治かあ、へえ、いい名前だ。うん。じゃあシンちゃんんだね。シンちゃん高校は？」

「え？あ 左井高です。」

「マジで！？私も左井高だよ。全然『最高』じゃないってね。へー、じゃあ後輩だ！まだあの先生いた？ほら生物の。」

「金髪先生！」

「やうやうー、真ん中ハゲてんのに金髪で、超カツコ悪いの！しかも若いフリすんだけど間違つてんの！服装とか、似合わないのにさあ。一回授業中にさあ、『身近に面白い生物はいませんか？』って訊かれたから、『はい、先生です！』って言つたらマジ切れさせてさあ！」

「

（　口、コレが噂に聞くマシンガントークつてやつか　。）

少し大人になつた信治であった。

休憩も終わり、また仕事に戻ると、やはり駅前支店という事もあつてか、けつこう客が来るのである。

しかし『駅前』と言つても、数時間に一回しか電車が通らない田舎の駅だ。踏切に捕まると、なんだかとても損した気持ちになる。しかも普通電車といつのは、『タタタタタタタタタタタタタタタタタタ』ってイメージだが、ここのは『タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ』で終わる。え？終わり？これだけ？けつこう待つてたのに？つてなる。そんな田舎でも、客は意外と来るもんだ。

午後二時。
店が閉まる。

（あつ？なんだ。もう終わりか。五時半まで仕事だけ、何すんだ

る?)

なんて余裕、ふつていた信治だったが、実はこれからが忙しいのだ。

涉外係、つまり外回りをしている人達が帰ってきて、預かつたお金や伝票を渡される。

それを急いで処理し、出納係に渡す。

出納係はその日のお金を全部預かつていいような所で、そこにあるお金を全て数え、入金や払い出した金額と合つか確認する。

合えばひとまず、ホッとするのだが、一円でも合わなければ、ここで合わないのか、お金の数え間違いではないか、などと全員がかりで、嫌な空氣の中での作業が始まるのである。

この日はすんなりお金も合つて、それじゃあコーヒー入れてくれ!といつ事になつた。

当然信治の役目。

(あれえ どれが誰のカップで誰が砂糖何個だっけ???)

彼にとつては、お金が合あつが合つまつたが、大変な作業が残つていたようである。

午後五時半

本當は終わりの時間だが、みんな何かしら仕事をしている。特に涉外係の人や、次長は忙しそうだ。

(僕は 何すりやいいんだ? こりや。)

なんて思つてると、女性陣が次々と帰りだした。

「お疲れ様でしたー！あれ？伊藤君も自分の仕事終わったら帰りな。

「

声をかけてくれたのは二つ先輩の草野さんだ。

「おひ。帰れ帰れ。そのうち帰りたくても帰れなくなるからな。」

係長はそつ言つて微笑んでくれた。

「あ、じゃあ お先します！お疲れ様でしたー！

帰宅する信治。

その数十秒後、

「ただいま。」

とアパートに着いた信治。

信治が借りたアパートはその信用金庫のすぐ隣にあるのだ。

「おかえり。」

の返事はない。

一人暮らしから当たり前なのだが、寂しいものである。

「ふあー、疲れた。」

まだ物が少なくキレイな部屋に寝転んで、信治は軽く目を閉じた。

（これからあの職場で働いていくのか 僕に務まるだらうか？とにかく頑張るしかないか。やるからこな一生懸命やるーうん、そうじよっ。）

いつの間にか信治は、ウトウトと夢の世界へ落ちていった

高校のスクールバスを降りた信治は、家まで数十メートルの距離を歩いていた。

ルンルンと歩く信治。彼は機嫌が良かつた。
なぜなら、みやげなく就職先が決まり、焦りのよみつな感覚がやっと無くなつた所だからである。

「これでやっと、父さんも母さんも安心してくれるかな？なんだか金に苦労してるみたいだから、少しでも援助してやれればいいなあ。

」

独り言を言しながら、もう暗くなつた道を歩く。
この坂を上れば、もう家だ。

（最近出たばっかなのに、なんだか懐かしく感じるなあ あれ？なんで懐かしいんだろう？）

信治は砂利道の坂を、慣れた足取りで上つていく。

（やうだ、この日は。）

家はもうすぐそこまで来ていた。

(ダメだ 行っちゃダメだ 行くな 行くな行くな行くな
行くな 行くな――!――!)

信治の手が玄関のドアに触れたとき、ハツ!と田が覚めた。

「ハア ハア 。

信治は全身に汗をビッショリとかいていた。

「またあの日の夢かよ 。

少し怖い顔をして、信治はそう言つたのであった。

1ヶ月が過ぎ、信治もなんとか金庫員としての動きができるようになつていた。

朝の「一ヒー入ればもちろん、金の数え方、機械の打ち方、そいつた仕事はもう素人の速さではなかつた。

それでもまだまだ先輩方に比べれば遅い方。
金の数え方、速いしきれいだし 。

機械の打ち方、速いし正確だし 。

これぞプロ!って感じである。ホンシトに速いんだ。

信治もそれを目指して頑張つている。
しかし彼にはビリしても苦手なものがあつた。

「あ、ああありがと「いじやいやしました!」

なんじゅ じつや、つて思われそうなのあこがれ。

なんどうつ まずタイミングがわからない。
いつ言えばいいのか。いや、どうちかとこうと誰かとカブリそうで
遠慮しているせいだうつか。

あとは緊張してこらから、どうしてもカニカニになるのである。

そしてそのセリフを言つてしまつて、さらに緊張する。

これぞ悪循環つてヤツであるー。

「伊藤君、緊張してるでしょ。リラックスクリラックスー！」

優しく声をかけてくれたのは、草野さんだ。

彼女は一番、新人の人の気持ちをわかつてくれる。彼女自身も入ったばかりの頃苦戦したらしい。

特に野田さんに怒られまくったとか。

そんな草野の目が輝いた。

「あれー、ノンちゃんカズちゃん！久しぶりー！」

「ゴウちゃんだあー元気してた？」

「高校以来だね。」

どうやら高校の時仲良かつた友達のようだ。

「何しに来たの？」

「お金を預けに来たの。」

「そんなお金あんだ？」

「失礼ねー。ひやんと貯めてるの。使わなこよつに定期こじみつと思つて。」

「えーらいー。じゃコレに名前と住所書いて。あと印鑑持ってきてる？」

「あーるよー。」

高校の頃どんなに仲良くて、社会人になると会わなくなる人は多い。

遠くへ行つてしまつたり、時間が合わなかつたり、連絡くがとれなかつたり、だからまたまた街で会つたりすると、ホント嬉しいものなのだ。彼女も例外ではなかつた。いつもより高くて大きな声が出ているのが、その証拠だ。

「草野さんー。コレお客さんに返しといてー。私休憩だからー。」

野田さんの声はいつも怖い。

(なんであんなキツい言い方しかできないんだらう。)

信治もそう思つていた。

「佐藤様！」

草野は頼まれた通帳を密に渡した。

「ありがとうございましたーー。」

信治とは違い、気持ちのいいあいさつがホールに響く。

「あれ？草野さん。今の密止めーー。金額間違つてるーー。」

出納係の木下さんの所には、処理した伝票とお金が回り回りへる。そこで彼女はミスに気づいたのである。

「すいませーん！佐藤様！」

「なんだ？」

「通帳を確認をさせてもらひつてようじこですか？」

中年男性の佐藤は、しぶしぶ草野の所まで戻ってきた。

「ああーー。ほらよー。」

「あーー。あのですね、十万円入金のハズが、手違いで一万円の入金になつてゐるんですよ。それで今訂正しますので少々お待

「はあーー。一万しか入つてないつてーー。ふざけんなよー。」

「はー、直しますので少々

「

「急いでんだよー！これで仕事に遅れたらどうしてくれるんだー。」

「申し訳ありませんー急ぎますので。」

「早くしりょー。」

「はー、本当に申し訳ありませんー。」

草野は深々と頭を下げた。彼女の友達は、何かヒソヒソ言しながらその様子を見ていた。

3時が過ぎ、店が閉まり

草野はどこなく元気がなかつた。

「ハア————。」

いや、これは完全に落ち込んでいるようだ。

彼女が悪いワケではない。入金処理をしたのは野田さんだ。しかし休憩から戻つて話を聞いた野田は、草野に一言も謝らなかつた。

信治はその事に少し腹が立つていた。

五時半、信治はもう帰る時間だ。

他の人達はまだ何かしら仕事をしている。

「じゃあ、すいません、お先しまーす！」

「おつかれー。」

「おひ、おつかれさん。」

ドアの前でみんなに挨拶すると、何人かが応えてくれた。

信治は何かを思い立つた様子で、そして意を決して口に出した。

「あの草野さん、今日カツコ良かつたです！普通、人のミスをあんな一生懸命謝れないです！しかも友達の前でなんて、なかなかできないです。おれは、そう思います。それなのに文句も言わないでホント、カツコ良かつたです！お疲れ様でしたー！」

バタンとドアを閉め信治がいなくなると、草野はなんだか照れ笑いをしていた。

それを見た次長、代理、係長、さらに木下の四人は顔を見合わせ、ちょっと驚いた様子で、やがて笑顔になつていた。

野田は少し戸惑ったような、困ったような、怒ったような、泣きたいような？とにかくそんな顔をしていた。

すぐ隣のアパートへ戻ってきた信治。

「あー、何言つてんだ？おれはあー恥ずかしいー！」

彼はそう言って布団に潜り込んだ。意識が遠のいていく

慣れない環境と毎日の緊張が、信治の体に疲労を積み上げていた。

最近信治は、その疲れのせいかすぐに寝るクセがついていたのだ。

そして信治はまた『あの口』の夢を見ていたのであった

バスを降りる信治。

家まで数十メートルだ。

外は暗い。砂利道の坂を上る。

そして玄関のドアに手が届いた。

(ダメだ！開けたらダメだ――――――！)

心の声に反して、その手はドアを開けてしまった！

明かりのついていない家の中は、不気味なほど暗い。

風が窓を揺らしてガタガタと鳴く。

玄関のすぐ目の前にある居間の障子に、何か大きな影が一つ揺れていた。

(もついいよ 見たくない 見せないでくれ ！)

障子を開く信治。そこで彼が見たものは

首を吊つて死んでいる、父と母の姿であった。一

それは、信治が最も忘れない記憶。
だが皮肉にも、忘れようと思えば思つてしまひ、忘れられなくなつてしまつものなのである。

信治の両親は、借金を苦にて自殺していた

『あの日』信治は、動かぬ両親の前で「」と語っていた。

「 なんで? どうして! ? 金が無いから! ? 借金が多いから生きて
いけないって! ? なんでだよ! おれ達をおいて死ななきやいけなか
つたのかよ! 金なんか無くたつて生きていけるだろ! 金なんか無く
たつて幸せになれるだろ! ? 金なんかより大事なもの、あるだろ! ?
おれは見つけてやるからな。金より大事なものを。 」

その時信治は、大きく見開いた目からは涙を流し、強く噛みしめた
唇からは血を流し、拳をかたく握り、全身を震わせ、そして心に強
く誓いをたてたのであった。

第一話・始まり（後書き）

のんびり書いていますが、もし「続きが早くみたい！」なんて人がいましたら書いて下さい。その時は超高速で書きますので（笑）

第一話・恋

3ヶ月が経ち、信治もすっかり信金マンの仲間入りだ。

「伊藤君、そこのやうじやなくて、やうやうやうまいじやん。」

あれから草野さんは、さらに親しげに話してくれるようになった気がした。

「伊藤君！何回言つたらわかるの…？そりじやないでしょー…？ちやんとやつてよね…！」

あれから野田さんは、さりに冷たく接してくるようになった気がする。

（人はそれぞれだ。気が合う人もいれば合わない人もいるさ。）

信治はそう割り切つて考えていた。

だが本当は、出会つ人すべてと仲良くなりたいと思つてゐる。

世の中やつやつ、思つよつにいかないものである。

そんなある日、信治は中学時代の同級生の男と再会した。一人暮らししている事を話すと、

「じゃあ今度遊びに行つてもいい？」

つて言つから、

「いいよ。」

と笑顔で返した。

が、信治はその同級生の事を好きではなかつた。別に大嫌いなワケではないのだが、例えば大事にしていた物を貸して、いつまで経つても返つてこなかつたり。例えば遊ぶ予定をしていたのを、直前になつて断つたり。

悪いヤツだとは思わないが、好きになれない。
こういう人はけつこういるものである。

この日だつて、一人で遊びに来ると思っていたのに、知らない男女5人も連れて来やがつた。

「 どうぞ。」

しぶしぶだが今更断るワケにもいかず 。

「つていうかさー、アケミまじありえなくねー？」

「アケミは駄目だよ。空氣読めよーつて言いたくなる。」

「ほんとバカだよね、アケミ。」

(アケミつて 誰!?)

さつぱり話についていけない信治。しかも気付けば男女三対三に分かれている。
もちろん信治は余り 。

(完全に場所が欲しいだけここへ来やがったな!)

だんだんイライラしてきた信治。そんな事は構いなしに、周りは酔いが進んでバカみたいに盛り上がっていた。

「昨日パチンコでやたらハマったから、ガラスのドア蹴つ飛ばして割つてやつたよ!」

「マジ!? カッコいい!」

(ただのハツ当たりじゃん。)

「私、九九全部覚えてるよ!」

「俺なんて分数のわり算できるもんね!」

(だからどうした!???)

信治の苛立ちは膨らむばかり。

そんな中信治の同級生、久保はかわいい女の子と二人きりで、こんな話をしていた。

「私の両親ね、自殺したの。」

「どうして?」

「わかんない。」

泣き崩れる女の子に久保は、

「わかる。わかるよ、その気持ち。」

そう言つて抱きしめたのであつた。

信治は、そつとアパートを出た。

近くの浜辺までやつてみると、大きめの岩に腰をかけた。

夏の夜の波の音は、なぜこんなに心地よく胸に響くのだろう。

なんだか泣きたくなつた信治は、波に向かつて大声で叫んだ！

「両親が健在のテメーに、何がわかるつてんだよ！…この苦しみが、この悲しみが、テメーなんかにわかつてたまるかよ！…何でもわかつたフリしてんじゃねーよ！…」

ハアハアと息を切らし、海が運ぶ少しだけ冷たい風を吸い込んだ。

「すつきりした？」

突然の女性の声に、信治は驚いた。

「えー？あつ 聞いてました？」

酔いも一気にとんで、信治は自分の顔が赤くなつていぐのを感じた。

「聞こえてたよ。でもいいじゃん！私もたまに叫びたくなる時、ここに来るんだ。ホントに叫んだことはないけどね。」

彼女はそう言つて笑つた。

パーマをかけた長い髪は、赤茶色に染めてあり、とても似合つている。また大きな目が印象的な、とても美しい人だ。年上の、大人の女性といった雰囲気がある。その笑顔に、信治は瞬心を奪われていた。

「君、ここにいらっしゃ見ない顔ね。」

「最近、近くのアパート借りて來たばかりなんです。」

「仕事で？」

「うん。風信です。」

「へえー、銀行マンなんだ！す、ここに住んでる！」

「いや、す、くないですよ。誰でも入れるようなんだとこだし、給料低いし。」

「ふうーん。でも私そこ使つてたなあ。」

「今は使つてないんですか？」

「うん、もう使つてないんだ。私、七海よ。君は？」

ななみ

「僕は信治です。伊藤信治。」

「私は出れないんだけど、夜はよくここにくるから、たまに会ってね。」

「はー。よひーんで。」

七海はまた、優しい笑顔を見せてどこかへ帰つていった。

信治はそのまま、しばりへ海を眺めていた。

「七海、さんかあ。」

はーーと気付くと、朝になつてこた。そのまま海辺で寝てしまつたらしい。

「うーん、何時だろ?」時計を見ると、針はもう十時半を回つていた。

フランクへとアパートに戻る、そこにはまだ誰もいなかつた。

「元しても、きたねえなあ。」

部屋は飲んで騒いで散らかつたままだ。

「少しば片付けてから帰ろ！ってんだ。」

もう一度とアイツとは遊んでやうん！信治は堅く心に決めたのであつた。

「い、いい、こ、こいつを、あせー。」

（やべー！またしつづいた。）

信治の力ミニ癖は治らない。

「ねえ、恥ずかしいから変な挨拶やめてくんないー！？」

野田が軽くにらみながらだめ押しの一言。

「。。」

返す言葉もない。

仕事が終わり、信治は一人アパートでムシャクシャしていた。

「わかつてんやー！僕だつてつまへぬおつとゆつてんやー！それができないから恼んでんのにー。」

(はあーあ 海でも見に行くかな。)

ザーン ザザーン

海は人の心情に似ている。

波一つ無く穏やかな時もあれば、激しく荒れ狂う時もある。

普段、信治の心は風の時が多いのだが、今日は時代ていた。

「 なに寂しそうな顔してんのよ。 」

「 七海さん! 」

信治の暗かつた顔に、急に光が差した。

「 なんかあったの? 」

七海はそう言って、信治のすぐ隣に腰掛けた。

信治は、なんだかドキドキしてしまっていた。

「 うん 職場で、僕を嫌正在するような人がいるんだけど、ちょっと怒られてさ。はあ どうも合わないんだよなあ、怒らせるつもりはないんだけどなあ。 」

「 どんな仕事をしても、合わない入っているんだよねえ。むしろいらない職場の方が珍しいと思うよ。 」

「 そんなもんですかね。 」

「 そんなもんよ。ひなみに、何して怒られたの? 」

「 ちゅうと恥ずかしいんですけど、どうしても密にする挨拶がうまくできなくて。咬んじゅったり、詰まつちゅったりで、止めて！って怒られた。止めようとして止めるなら止めてるのー。つてね。」

「 それで、行き場のなつよつなイライラに襲われてるってわけね。」

「 なんですよ。どうしたら直りますかね。」

「 うーん 普段はいつも普通に話せてるんだから、やっぱ緊張してるんじゃないかな。変に良こと見せようとすると、体が強張って逆に失敗する事ってよくあるのよね。やんとまは、深呼吸をする。」

「 深呼吸ですか。」

「 息を思い切り吸つて！」

「 スウー！」

「 吐くー。」

「 フウー。」

「 落ち着くでしょ。」

「 でも職場で出来るかなあ？」

「 その苦手な人がいるから、せりに緊張するんでしょ。」

「はい。」

「そういう人は、自分にプラスの人間だと思は込んでいたのよ。」

「自分にプラス？」

「そう！今日はこの人に絶対怒られないように仕事をするぞ！とか、この人が言つてくれるから自分がドンドン成長できるんだ！とか、いつか仕事でコイツを見返してやる！とかってね。嫌いだ合わない一緒に仕事したくない、って思つてると、なんかやる気も無くなっちゃうでしょ。だから無理やりでもいいから良い方向に考えちゃうの。意外とコレ、効果あるのよ。」

「なんか、詳しいですね。」

「私も昔は苦労したもん。」

「なんか 苦労してたように見えないッスね。」

「あら、それは良い意味かしら？若い時は苦労した方がいいのよ。信治君も、今の内にいっぱい苦労しどきなさい。そうやって人は成長するんだから。」

少し年上のお姉さんといつよつ、一回り年上の先生と話しているようだった。

(先生に恋する生徒つて、こんな気持ちなのかな?)

学生の頃は理解できなかつたその感情は、今なら少しはわかる気が

した。

（つていうか、これが恋つてやつなのかな？恋 恋かあ いい
もんだな、恋つて。）

信治は、心の闇に光が差すのを感じた。不安で真つ暗な未来に、その光が道を示してくれているようだつた。

（そうだ！ そうだよ！ 金より大事なもの、あるじゃないか！ 金での気持ちは買えまい！ 金なんかより、恋心の方が大切だ！ 金なんかより、七海さんの方が必要なんだ！ ）

信治はもう、自信満々でそう確信したのであつた。

次の日、信治はまた海辺へとやつてきた。

「こんばんわ、信治君。」

振り返ると、また優しい顔の七海がいた。

「こんばんわ！ 七海さんのおかげで、今日はバツチリ挨拶できましたよ！ それすごく気楽になりました！ ありがとうございます！」

「そんな大げさな。私はただ思つたことを言つただけよ。」

「いや、あなたは僕の恩人です！ 先生です！ 神様です！」

「アハハ、大げさすぎるわよ。でも、うまくいって良かつたわね。」

「うん。 七海さんいつもこんな時間に外にいて、心配されないんですか？親とか 彼氏とかに。」

「親はないの。 彼氏はいるけどね。」

「ふーん。」

「なんてウソ！ 彼氏もいませんーあつ、今残念そうな顔したでしょ。」

「

「うん、しないしてないよ。」

「今度は嬉しそうな顔してるし。」

「してないつたらしてないのー。」

信治の心は、七海にはお見通しのようだった。

「見てーーすーこ星きれいだよー。」

「ホントだーすーこやー。」

二人は寝転がって夜空を見上げた。
そこには満点の星空が広がっていた。

「都会の人間に唯一癡態できると聞えるのは、僕はこの星空だと思つんだ。」

「ねえ、死んだ人の魂つてどこに行くと思う？ 星になるって話

もあるけど。」

「 そうかもしない。死んだ人は星になつて空から僕らを見守るんだ。僕らも空を見上げては、その人を事を思い出す。そしていつか流れ星になつて、また地上に戻つて人生を歩むんだ。」

「 素敵ね。私もいつか 星になれるのかなあ。」

「 七海さんがもし死んだら、きっと他のどんな星よりも綺麗で、明るくて、輝く星になるよーきっと。」

「 そうだといいね。」

一人はしばりへの間、無言のまま寝そべつていた。

海のにおい。

波の音。

頬をなでる柔らかな風。

そして満点の星空。

これが金が無くてもできる、最高の贅沢なかもしない。

「 こりひしゃいませーーー。」

明るい信治の声が響く。

「 伊藤ちゃん、今日もいつもの、お願ひね。」

毎日来るこの客は、土木会社の事務のオバチャンだ。

毎日信治のところに入金のお金を持ってきては、毎日信治の手を握る。ギューッと握る。

「あのオバチャン若い男に目がないから、気をつけろよ。」

と代理は言つけれども、いつたい何をどう気をつけねばいいものか
うーん。

その日仕事が終わったのは、夕方6時過ぎ。
だんだんと帰る時間が遅くなってきた今日この頃。

珍しく涉外係の長谷川さんが、早くに仕事が片付いたようだ、

「シンちゃん！ 打ち行くか！」

と誘つてきた。

「内？？」

「パチンコだよー。やつたことねーな。教えてやるからー。」

「あ、はー。」

流れで了解してしまった信治。正直パチンコに興味はなかったのだが、初めて誘つてもらつて嬉しかったのも事実だ。長谷川さんは体格のいい男の人で、信金さんというより、プロレスラーに見える。

近くにある、ホントに本当に小さくてボロいパチンコ屋に入ると、ジャラジャラと騒がしい音こ_ト瞬怯みそ_トになる。

長谷川はパチンコではなくスロットの机に座った。もちろん信治はその隣。

「いいか、このリールにフを狙つて打つてみな。」

「はい。」

（フ、フ、フ、フ　。）

ビシッと止めたがフなんかどこにもない。

「難しいッスね。」

「慣れれば簡単だよ。いいか、田押しはリズムで押すんだ。フ、フ、フ！」

長谷川が押すと、ちゃんとフが止まる。

「ほらな。」

信治も狙うが うまくいかない。

そんな感じで一時間後。

なんだかわからないが勝った信治。

「初めはビギナーズラックってヤツで勝つんだよ。本当に。また今度な。」

そう言って長谷川は帰つていった。

「よくわかんないけど 六千円勝つた やつたーーー！」

信治にとつての六千円プラスは、とても大きなものだつた。

こつものよつに海岸へやつて来た信治。

「今日は遅かつたのね。」

こつものよつに七海は急に現れた。

「今日初めてパチンコやつてきたよ。んで、なんと六千円も勝つち
やこましたーーー！」

血邊づな信治に對し、

「たつたの六千円?」

と冷ややかな七海。

「僕にとつてや大きいのーーー！」

「ふーん でもあんまり行かない方がいいよ。癖になると止められ
なくなるから。」

「はこよ もうじめじめへりへ行く気もないし。」

その時はまだ、軽い気持ちでそう答えていた。

本当に止められなくなる自分を、想像もできていなかつたのである。

なんでもないような会話を、毎日交わした。

それはいつしか信治の日課になっていた。

何をするでもなく、ただ話をするだけなのに、なぜ飽きないのだろう。楽しいのだろう。やはりそれが恋というやうなのか。

とにかく信治は、毎日のその時間が楽しみだった。

「伊藤ちひさん。今日もお願ひね。」

いつものオバチャンに二つものよみで手を握られ、それも仕事だと張り切る信治。

だがこの日、信治は耳を疑うよみのことを聞いてしまつ。

「あー、伊藤ちひさん。今日ちひと魯いですね。」

「はい。あれ、なんかあるんですか?」

「今日一周忌なのよ。近所の娘さん。なんていつたつナ
やつ、七海ちひさんよ。」

「七海。」

信治の鼓動が一気に高まつた。

「すいい美人でね、愛想も良くて。私も昔から知つてゐるんだから
まさかこんな早く亡くなるとはねえ。」

「その人って、何歳位ですか？」

「ナハネ　伊藤ちゃんより少し上の　25、6じゃないかしさ。」

まさか

信治は思った。

（まさか、そんなハズはないよな。だって昨日まで会って話してたんだもの。同じ名前の人なんてこの世には二つぱいいるワケだし。）

それでも不安は頭を離れない。

嫌な予感が胸につづくまつっている。

確かめなければ！

いつもの時間、いつもの場所。

いつものように後ろから七海の声がした。

「こんばんわ！今日も来たね。」

信治はいつものようには振り向かず、いつも言った。

「七海さん　七海さんって、なんで夜にしか出て来れないんですねか？」

「それは　親が夜に仕事に行くからよ。」

「親はいないって、前に言つてしませんでしたか？」

「『メン、ウンウン。本当は仕事で』

「ホントに本当の『』と、『』であります。」

「子供がいたの。」

「子供?」

「道路の真ん中にね、子供がいたの。」

「。」

「車が来て、子供は気付いていなくて、私が助けた。」

「それで?」

「子供は助かっただけど、私は 跳ねられて 。」

「。」

「去年の『』の日。 私は 死んだの 。」

後ろを見なくとも、七海が泣いているのがわかつた。
それでも信治は振り向かなかつた。

「僕は、七海さんが、好きだった。付き合えなくとも、一緒にいるだけで幸せだった。ほんの少し、将来一緒にいたらとか、そんなことを考えたりもした。でも、もうそんな気持ちはない。 なんで僕の前に現れた? 一人での世に行くのが寂しかつたから? 僕を道連れにしようとして? ふざけんなよ! やつ

と氣の合う人と巡り会えたと思ったのに！幽靈だったなんて！バカみてーだな、俺。」

「違うのー。聞いて、私ー」

「初めて人を好きになった。初めて恋つてヤツを感じた氣がしたけど 気のせいだった。欲の無い君に、形の無い恋心を抱いた どちらも幻だった。だつてもう 怖くて 震えるんだ。もう君を好きとか、そんなことは考えられないんだ。 消えてくれ。早く今すぐ消えろよーーー」

言つて後悔した。そんなことを言つてもりじやなかつた。やつと後ろを向いたとき、七海はもう、いなかつた

「ひひ あああああーーー」

信治はその場に泣き崩れた。ただただ、泣くしかなかつた。

恋は幻 そんなんじやない。そんなんじやないと、信じたかった。

「なあ、幽霊って信じるか?」

「さあ いるんじゃないの? わかんねえけど。見たことないし。」

「もし、田の前に超美人の幽霊が現れたらどうする?」

「どうするって ヤつちやう? 誰にもバレないし、子供もできないからやりほうだい! ってか。」

「お前はすぐそういう方に考えるもんな。マジメにさ。」

「悪かつたよ。 美人でも幽霊じゃあな。怖いから逃げちやうかもな。」

「やっぱ そうだよな。そんなもんだよな。」

「何だよいきなり。」

「いや、気にしないでくれ。ちょっと訊いてみたかっただけだから。」

信治と友人の克也は、信治のアパートで遊んでいた。

「信治吸わないんだつけ?」

克也はタバコに火をつける。

「吸えるけど、吸わないの。吸えるのに吸わない。なんかカッコ良くなえ？」

「 そうかあ？ ってか吸えねーだろー。」

「吸えるってー！」

「じゃあ、吸つてみな。」

克也は自分のタバコを一本取り出し、信治へと渡す。

「 。」

信治はまるで吸い慣れているかのように、タバコをサッとくわえ、ライターを片手でシュツとつけ、もう片方の手で火を囲み、目を閉じ、大きく煙を吸い込んだ。

「ゲホ！ ゲホッ！ ガハッ！ オエッ！ ゲホゲホ！

ウー ほら余裕！

フ

「ど二がよー！」

久しぶりに会つた友達とのクダラナイような時間。でもこのクダラナイ時間は、なんでこんなにも楽しいのだろう。

山がハデな衣装に衣替えするこの季節。ついに信治は、外に繰り出されることになった。つまり預金係から、

涉外係に変わったのである。

男はやはり外の係にまわされるものらしい。

そのやり方を教えてくれたのは、パチンコも教えてくれた長谷川さんだ。

そして涉外係は、信治、長谷川さん、そして木村係長の三人になる。もともとこの地区は三人で歩いていたらしい。

長谷川さんは見た目に似合はず、とても愛想が良くて客に慕われていた。

木村係長はその上を行くほど慕われている。
仕事も真面目で、金を借りたい客もガンガン見つけ出し、この駅前支店に貢献している。

背が高く、メガネがとても似合つ人だ。
でも痩せてる割にかなりの大食いだつたりする。しかも早い。
普通に食べているようにしか見えないのに、気づけば信治が半分食べる前に食い終わつていたりする。
いつの間に うん 不思議だ。

預金係は信治が抜けて三人。

話が好きで誰とでも仲が良い木下さん。
もちろん野田さんとも仲が良い。

野田さんは好き嫌いが激しいと思われる。が、上司にはとても愛想が良い。

それは関係ない感じで、なんだか木村係長と親しげだ。

そして預金係をまとめているのが立花代理。

この人も、良い人で面白い人だが、たまに困る時がある。

「伊藤！倉庫から伝票持つてくれ！あれあれ、あのヤツ。
」。

そして何処かへ行つてしまつ。

（え！？なになに？？何の伝票？？？）

伊藤はチョクチョクそんな感じで、パニックに陥つてゐるのである。

融資係は草野さんと永井次長の二人。

草野さんは補助的な感じで、預金の方も手伝つてゐる。

永井次長はとにかく優しい人で、とにかく甘党だ。ホント糖尿病にならないか心配になる。

草野さんにもよく注意されている。

この二人は親子のように仲が良い。

そして全体を後ろから見守つてゐるのが、柳田支店長。

いつもただ新聞を読んだり、どつかの社長さんと話をしたり なんだか楽そうだ。

でもこの支店の最高責任者なんだから、きっと何かと大変なんだろうと思っていたが、

「支店長なんてヒマなもんなんだよ。」

つていつだか言つてた。

(ホンダがなんだ)

なんとなくなつたり

でも、い、も、い、て、いた

「支店長は楽そうにしてた方がいいんだ。そしたらみんな支店長になりたい！って頑張るだろ。」

なるほど
確かに
納得した

さて、外勤になると自分の分は、自分で合わせなきやならない。

朝持つていったお金、客から預かつたお金、本当はダメだが客が払はいたお金、そういうものを合計してもちろん一円でも合わなければ、自分は当然、みんな帰れなくなる。それはマズい。

とはいえ慎重になりすぎると時間がかかり、そんなんじゃ今日行く予定の家や会社は全部は回りきれない。

雨が降つても傘なんかさしてられない。

あー忙しい！

「忙しいんだって！」

「さうか 大変そうだな。」

電話越しに克也にグチる信治。

「でも中にいるより気楽なんじゃないか？」

「まあそつだね だいぶね。」

「じゃあいいじゃん。頑張れよ！」

「おつーそつちもなー。」

携帯つてヤツは便利だと思う。いつでも聞きたい人の声が聞けるのだから。

「毎度様でーす！風信です！今月から代わりました、私伊藤と申します。」

そう言つて名刺を渡すのも、もう慣れたもんだ。

「はあ！？風信さん！？前の人はどうとか行つたんだか！？」

相手は田子さん。田に子で、『たに』と読むらしい。だいぶ年配の、おばあちゃんだ。ここは月に一度、定期積金の入金の為に寄る。

信治は「の口初めて来たのだが そういうえば係長が、「田子のおばあちゃんには、気をつけろよ。」って言っていた。

（「あなたおばあちゃん相手に、何を気をつけろって言つたんだらう（？？）

とにかく仕事をせねば。

「ではあの エ毎月の入金のヤツを

「まあまあ、お茶煎れるから、飲んでけ。あれ若えもんだして、コーヒーの方がええがな？」

「いや、お茶でいいです。」

「はこね。」

と言つておばあちゃんは奥へと消えた。

そして持つてきたのは、コーヒーであった。

「 ありがとうございます。」

「おめえみてえな若えもん見でれば思ひだすの ウイ達が若い頃はな、食つもんも、着るもんも無くてな、こんなコーヒーなんて無がつたんだよ。」

「はい。」

「あの頃は、真っ白いご飯があるだけで贅沢でな、米粒一つ残すだけでも、そりあ怒られたんだ。今の若えもんはすぐ残して捨てる

べ。ワイ達はそういう時代を生きてきたから、絶対対残さねえんだ。

「

「はい。」

「今の若えもんは恵まれてゐる。ワイ達が若い頃はな、食つもんも、着るもんも無くてな、こんなコーヒーなんて無がつたんだよ。」

「はい。」

（あれ？なんか話が堂々巡りしてゐる？？）

「あのお、忘れない内に入金しちましょうか。」

「んだのお ~~昔は~~いつやつて預ける金も無べくなあ、米粒一つ残すだけでも、そらあ怒られたんだ。今の若えもんはすぐ残して捨てるべ。ワイ達はそういう時代を生きてきたから、絶つ対残さねえんだ。」

「

（こやこや、待て待て…）

「やうですか、じゃあ入金のお金と証書をお願いします。」

（あるとおばあちやんは、よしやくそれを取りに立ち上がつた。）

（あぶねえあぶねえ、危つぐバアチャンワールドにハマるとこだつた。）

やがて戻ってきたおばあちやんが一囁。

「 ワイ達が若っこ頃はな、食つもんも、着るもんも無くてな、こんな『一ヒー』なんて 」

（ おーーーーーーーー ）

「 時間後。 」

「 おひ、無事帰つてきたな。 」

「 系長が、氣をつけろーって言つた意味、わかりました。 」

「 ははは、これからはひつこいつ、元々逃げる方法も考えていいかなきやな。 」

「 信治の口論の意図の、あのね、おばあちゃんが出てきたことは、聞つてもない。 」

信治はバスに揺られ、とある場所へ向かっていた。

その日仕事は休み。毎週土日が休みなのは、風信の唯一の生き残り。でも、妹は、おじさんが面倒を見てくれていて

信治が向かう先は、信治のおじさんの家。そこで妹が世話をなつているのだ。

両親が死んで、信治はすぐ仕事に就きアパートを借りたが、まだ学生の妹は、おじさんが面倒を見てくれていて。

信治は箱菓子を手にチャイムを押す。

「はーい。」

と照るい声で出迎えてくれたのは、妹の春奈はるなだつた。

「おひ、久しぶりだなー!元気か?」

「うう。お兄ちゃんは仕事どう?」

「うん まあまあかな?」

「ふふふ、とうあえず中へびづや。」

おじさんの家は、そんなに遠くはない。だが車を持っていない信治は、なかなか簡単に来る事ができなかつた。

いや、本当は妹に会うのが怖かったのかもしれない。お互にびづしても、両親の事を思い出してしまつからだ。

信治の不安はよそに、妹は全然平氣そうに見える。優しい妹は氣を使つて、そう見せてくるだけかもしれないが。

「おじさん、お久しぶりです。」

「おひ信治、元氣そうだなー!」

「はー、おかげさまで。あの、いつも妹がお世話になつてます。」

信治は買つてきた箱菓子を手渡した。

「そんなのいいのに、むしろ春奈が家事をしてくれて、助かって
いるくらいだからね。今日はどうやってこながで？」

「バスで。」

「やうか バスだと大変だ、金もかかるし
車を買つてやるひー」

「えー?」

「とは言つても、ローンを組んでやるだけだ。支払には自分でやつ
な。それでも良ければだが」

「あつがとつひーれこますー助かりますー」

おじさんは、春奈の学費も全部払つてくれている。

信治のアパートの敷金礼金、それに必要な家具代だつておじさんが
払つてくれた。

信治はもう感謝の気持ちでこづぱこだつた。

(こつか僕もお金を貯めて、おじさんのよつて誰かを助けてやるひー。

)

そつ思つていた。

空から降る雨が、たまに雪に変わるこの季節。
今日は風信の忘年会だ。

美味しい『』飯の後は、カラオケ。みんな歌が上手い。本当に上手い！ 本当は、草野は、そんなに上手くなかった。

ともあれ大いに盛り上がった。いつもは怒りっぽい野田も、いつもは無口な支店長も、今日はみんな楽しそうにだった。

「シンちゃんも歌いなよ！」

木下にせられ、一曲。

職場では見れない、みんなの素顔がちょっと見れた気がした。

（思つたより、楽しいもんだな。）（うこう飲みも。）

信治も楽しんでいたようである。

ある吹雪の夜。

まだ起きていた信治の耳に、『声』が聞こえてきた。

「キャンキャン…ウー キャン…キャンキャン…」

悲痛なその『声』は、子犬のものと思われる。

（なんだ？ 犬ぞうしのケンカかな？）

やつ思つていたが、『声』はやむぞうか大きくなるばかり。

信治の脳裏には、昔のある日のことが蘇つていた。

家の近くのゴミ捨て小屋。幼い信治が通り過ぎた時、その『声』は聞こえた。

「ニヤー ニヤー 。

猫だ！でもどこから？

見渡す限り、猫の姿は無い。だが確實に『声』は近くにいるのだ。

その『声』に近付いてみる ここだ！

そこにはガムテープがグルグルにまかれた、ダンボール箱が一つ。

まさか

幼い信治は力を振り絞り、ガムテープを少しづつ、少しづつはがしていった。

ようやくフタを開けられる状態になり、信治はソッと中を覗くとそこには、ニヤンとも可愛らしい子猫が一匹！

信治はギュッと抱きしめた。

こんな可愛い猫を、誰が！？何で！？こんな所に、しかもダンボール箱に閉じ込めて こんな、殺したようなもんじゃないか！！

幼いながらに、怒りを感じた。

「父さん！母さん！猫が！」

「どうしたの、そんな猫なんか拾つてきてー。」

「捨てられてたんだー。」

「ついに猫を飼つよつた余裕はないー! 捨ててきなさいー。」

「でも

「捨ててきなさいー。」

仕方なく信治は、玄関の前に猫を置いた。

「「」あんね。ひやんと生あるんだが。」

「ニヤン。」

ワケもわからず置き去りにされた猫。

後でこいつそりメシを食わせたが、その後、その猫を見かけることは無かった。

無事に生きたのか、それとも。

確かに金で救われる命もあるだろ。

テレビでも、貧しい国の子供が、飢えて死んでいく現状を流している。

信治には、子犬を飼つて食わしてやる金の余裕なんか無かった。

アパートの部屋に、動物を入れる事すら禁止されている。

だが信治は子犬の元へ向かつた。
なぜなら『声』を聞いたからだ。

その『声』は確かにこいつ言っていた。

『助けてー』と。

「よしよし、もう大丈夫だ。寒かつたろ。」

泥まみれで雪の穴から出れなくなっていた子犬。
体は冷え切つていて、ブルブルふるえている。

信治はアパートに連れ帰り、暖かいシャワーで体を洗つてやつた。

落ち着いたところでメシを『え、やがて子犬は安心して眠りについたのだった。

（金が無くたつて、救える命はあるんだ。父さん、母さん あたた
達の命は、金が無ければ救われないものだったのですか？）

こいつしか信治も眠りについていた。

ドンドンドン……とこうドアを激しく叩く音で、信治は目を覚まし

た。

「伊藤さんーーいますーー？」

この声は 大家さんだ！

「ワンワンワンーー！」

子犬は元気に鳴いている。

（ やばいーー！）

状況を理解した信治。

子犬に

「しーーっ。」って言つても、
「ワンワン、キヤンキヤン。」とまらない。

仕方ない。腹をくくつて玄関のドアを開けた。

「伊藤さんーーアパートで動物を飼えないことは、お話しましたよねーー！」

「あー、こいつは昨日雪に埋まつてて、助けてやつたんですよ。ひとまず部屋に入れましたけど、飼うつもりは

「じゃあ今すぐ追い出しなさいーー！」

「ちょっと、待つて下さいよーーせめて飼い主が見つかるまで、置いといたらダメですか？」

「そういうのを一つ許すと、他の人がマネするでしょう…ダメです…」

「じゃあせめて今日一日だけでも。」

「ダメです…ペットが欲しいなら、アパートを出て行きなさい…」

「いや、別に僕はペットが欲しいワケじゃなくて、とにかくここに助けてやりたいだけなんです。」

「なら金を貯めて家でも買うのね！犬を追い出すのがイヤなら、あなたが出て行けばいいわ！」

「わかつ」

信治が言いかけたとき、子犬は急に走り出ると、そのまま開いていた玄関から出て行ってしまった。

「あつ…！」

まだ名前も決めていなかった子犬の名も呼べず、もう姿が見えない玄関先で、信治は立ち尽くした。

「もしあいつが死んだら、俺はあなたを一生恨みますよ…」

大家さんを睨みつけ、子犬を探しに走った。

でも子犬は見つからず、一週間待つたが、結局それから姿を見ること無かつた。

いつかよく来ていた浜辺。あの時より海が寂しそうに見えるのは、冬のせいだらうか。それとも七海がいないからだらうか。

「ちくしょう　ちくしょう！　結局金が無ければダメなのか！？」
「小さな命も救えないつていうのかよ！？」

防波堤の壁を殴つても、残るのは手の痛みと、虚しさだけだった。

また桜の咲く季節がやつてきた。

信治のいる駅前支店は人事異動が無く、みんなそのまま。信治にとつてはホツとするところである。

信治の歩く地区も変わらず、密と信治は、もつ顔見知りだ。

「伊藤君、悪いんだけどこの定期解約して欲しいのよね。」

保険屋さんの石田さんが持つてきたのは、十万円の定期預金証書だった。

「ありや、なんかあつたんですか？」

「来週息子の誕生日なんだけど、新しいゲームの機械が欲しいんだつて。けつこうするのね、今のゲームつて。」

「定期崩すのはもつたいないんで、よかつたらカードローンでも作りませんか？」

「んー、でもそれ作ると使つちやうのよね。それに来週までに出来る？」

「んー、ギリギリかな？じゃあしうがないですね。」

信治は解約用の伝票と、朱肉をバックから取り出した。

「では、これに名前とハンコを、あと証書の裏にもお願ひします。」

「これでよし、かな？」

「はい。あ、ハンコこれで間違いないですかね？」

「たぶんコレだと思つんだけど。」

「もし違つたら、また明日にでも伺います。来週までに持つてくれば大丈夫ですよね？」

「すいませんね、お願ひします。」

「いえいえ。とにかくで、犬見てないですよね。」

「あー どんな犬だつたつけ？」

「小さくて柴犬みたいな顔で、毛は茶色なんだけど、右前足だけ真っ黒の犬です。」

「んー やつぱり見てないわね。」

「そうですか、ありがとうござります。」

信治は密に、あの日助けた子犬のことを聞いて回っていた。が、有力な情報は得られなかつた。

「毎度様でーす！」

「」は月に一度寄る、鈴木さんの家だ。

鈴木のおじこさんは、世界のことをわざと詳しへ、こつも一つ教えてくれる。

「……ところで、子犬、見てないですよね。」

「見てないなあ。」

「そうですか。」

肩を落とす信治。するとおじこさんは「うわあ」と叫んだ。

「『わることすべてが、害になるとまかぎらない』これは、イタリアのことわざだ。」

「どうこの意味なんですか?」

「良くないことも、受け取りよつによつては、善に変えることができる。そういう意味だ。もし子犬が出て行かなかったら、君がアパートを追い出されていたかもしない。子犬はそれをわかっていて、自分から姿を消したんじゃないかな。」

「でも、また穴に落ちたりしてるんじや。」

「大丈夫さ。一度助けてもらつた者は、その命を大事にするもんだ。きっと、どこかで元気にしとるよ。」

おじいさんの言葉に根拠はない。それでも信治は、なんだか心が落ち着いた感じがしていた。

「うめんくださーい！」

「あら、シンちゃん。ねらいど悪かったわ。今でもたとこねのよ。やへ、上がって。」

「Jは高額預金者、佐藤さんの家。Jのおばあちゃんは、いつも晝飯をJ馳走してくれる。

とても親しくなり、いつしか

「ばあちゃん、今日は何？」

「特性カレーよ。絶対おいしいから。」

「わあ。こりや楽しみだ。」

——豊安らぐ時間であつた。

高額預金者とは言つたが、ばあちゃんはお金持ちといつワケではな

「本当に？それは良かつた。」

自分の為に、料理をして待つてくれる人がいる。
信治は嬉しかった。

自分が作った料理を楽しみに、いつも来てくれる人がいる。それだけでおばあさんは喜んでいた。

急にメロディーが流れた。信治の携帯の着メロだ。

「すいません。」

と、携帯をとる信治。

（げつ、川岸さんだ。）

川岸は、ガソリンスタンドの事務員のおばさんで、いつも信治に電話をして呼び出す。

田那さんは自衛隊なので金持ち。風信に定期をいくつも作っている為、逆らうに逆らえないのだった。

「伊藤さん、今すぐ来てちょうだい！」

「いや、今すぐはちょっと」

「小銭が足りないのよ。早く来てよ。」

ツーツー 切られた。

「ゴメンばあちゃん。行かないと。」

「大変だねえ。また明日寄つてよ。」

「うん。じゃあまた。」

急いで川岸がいるガソリンスタンドへ向かう。

密と親しくなつて、良こいとまあれば、悪いこともある。もちろん
こつけは悪いほつ。

「毎度様でーす！」

「あら、早かつたわね。」

（お前が早く来いつて言つたんだるーがー！）

ちゅつとムカツ！

「じゃあ両替してくれる？百円を一本と、十円を六本。あと一円を
一本ね。」

「百円を一本とは、百円玉が五十枚まとまつた棒状のものを一つ。と
こつ」と、一万円分になる。

「あー、すいません。十円が今一本しかないですね。」

「一本じゃ足りないわよ。持つてきてー！」

「では今一本やるので、残り四本は後でもいいですか？」

「いいわよ。」

ともあれ、一旦支店に戻つてまた出て来なければならぬ。だいぶ

時間口スだ。

「まつたぐ。そんな遠くないんだから自分で行けよなー。」

この人には、信治もついグチを言いたくなる。

急いで他の集金先を回り、例の両替も届け、時間は午後一時三十分。

「なんとか間に合ったな。ってか時間余ったくらいだ。」

残す先は一軒だけ。

「どうすっかなあ。」

お金を締める為、遅くても三時半には帰らなければならない。

それ以上かかるならば、一旦お金を締めた後、また金を持たないで回るしかない。

残り一時間。行く先は一軒だけ。だがそこは、田子のおばあちゃんの家だった。

「行っちゃえ!」

一時間もあれば、なんとかなるさ。そう考えたのだった

「遅くなつました——。」

時間は午後四時一十分。

信治は慌てて帰つてきた。

「伊藤一遅いぞー。」

代理に怒鳴られた。

「また田子のばあやんだな?」

係長はわかつてくれている。

「まったく、じゅうがないな。伝票とかあつたひ、よこしなー。」

野田が手伝つてくれた。

「シンちゃん、お金数えるよ。」

木下も助けてくれる。

「私、コーヒー煎れとくか。」

草野も。

「俺も、あのばあやんこむか引したんだ。五時半までかかつたんだ
からー。」

と、長谷川。

「あの時は心配したよ。事故にあつたんじゃないかーってな。」

と、次長。

「もう少しで、警察呼ぶといだつたよな。」

と、代理。

みんな笑っていた。

支店長は相変わらず無口だったが、静かに後ろから見守ってくれて
いる。

職場といつより、まるで一つの家族のようだつた。

(家族) そうだ。家族を金で買えるか、って言つたら、無理なん
じゃないか? 金で家族は買えない。なら家族は、金より大事だつて
ことだ! このみんなは、僕の家族のようなもんだ。決して金では
手に入らない、家族だ!)

信治の心中で、希望の花のつぼみが、確かに膨らんでいくのを感じていた。

それから少し経つて

野田が、会社をチョクチョク休むようになつた。

誰も、そのワケを言わなかつた。

信治も、他の人ならともかく野田さんなら、と、特に気にしていかつた。

たまに来ても、なんだか元気がない様子。

（そんなに休むなら、辞めちまえばいいのに。人手が足りなくなつて迷惑だ！）

信治はそう思つていたが、一番負担のかかる木下や立花代理は、文句一つも言つていなかつた。

（なぜだろ？木下さんはともかく、仲が良さそうでもなかつた立花代理まで何も言わないなんて。。。）

そのワケは、眩しい太陽が照りつける、八月に入った頃にわかつた。

「信治、落ち着いて聞けよ。」

いつになく強張つた口調で、係長が伝えてくれた。

「野田さんがな　　亡くなつた。」

「えー…どうして？」

「最近よく休んでいたる。心臓が悪かつたそうだ。昨日急な発作が

きて、そのまま。」「

「 そうだったんですか。」「

「 明日の夕方六時から葬式がある。いいか、明日はなるべく早く帰つて来いよ。みんなで葬式に行くからな。」「

「わかりました。」

（ 野田さんが 死んだ！？こんな急に！？確かに最近休んでばかりだったけど、でも出勤したときは、いつものように 僕に

「遅い！」とか

「下手くそ！」とかって憎まれ口をたたいていたのに ）

翌日、信治は約束通り早く帰ってきた。

二時半には自分の仕事を終え、中の仕事を手伝い、そしてみんな早めに職場を後にした。

五時半を回り 残つたのは係長と信治だけだった。

「 係長、なんか手伝えることがありますか？」「

「 いや、いいよ。俺ももうすぐ終わるから、先に行つてな。場所、わかるよな？」「

「 はい 係長、僕も葬式に出た方がいいですかね？」「

「当たり前だ。早く支度しな。」

「野田さんは、僕になんか来て欲しくないんじゃないかな。嫌われてたみたいだし。いつもいつも文句ばっか言つてさ。いや、僕だって悲しいですよ。でも、嫌いな人に拌まれても嫌だろ？」

「バカヤロー……野田はな、信治のことを見てたんだぞ……」

「え？」

「去年、信治が草野に言つたことがあるだろ。他の人のミスを一生懸命誤るなんて、普通できないつて。しかも、野田もみんなも聞いてるなかでさ。あの後、野田がなんて言つたと思つ？」

「さあ、どうせ文句なんぢゃないですか？」

「さう思つだろ？野田はな、骨のある新人が入つて来たつて、喜んでいたよ。育て甲斐があるつてな。」

「ウソだ。だって野田さんは、いつも叱つてばっかで、いつも厳しくて、いつも『遅い！』とか『そんなのもできないの！』とかつて言つてくるのに。」

「そう、野田はそつやつて信治を育てていた。自ら嫌われ役になつて、信治を鍛えていたんだ。簡単なことぢゃないぞ。俺にはできないな。自分は嫌われて陰口言われても、新人を育てる為にそれを貫くのよ。」

「。」

「よし、行こつか。野田が待ってるぞ。」

係長と一緒に野田家にやつてきた信治。中には、喪服姿の人が大勢いた。

係長が先に、野田の遺影の前に座り、手を合わせた。続いて信治も遺影の前に座る。

信治は、手を合わせたまま、目をつぶつたまま、泣いた。

卷之三

信治の声は、静かな会場を駆け回り、それは他の人達の涙も誘つた。草野もその中の一人だつた。

野田の写真は笑っていた。なんだか、喜んでいるように見えた。

「信治、この後飲みに行くか！俺がおじるからよー。」

係長が背中をポンと押して、酒に誘ってくれる。

「 はい。」

まだ涙田の信治は、素直に頷いたのだった。

野田がいなくなつたからか、四月に異動が少なかつたせいか、十月に大幅な人事異動があつた。

駅前支店も、もちろん。

草野、長谷川、立花代理。この三人が異動になつた。

代わりに来た三人は、預金係に、この年入つたばかりの女性、川村さん。渉外係に、木村係の二つ下の男性、寺道さん。そして立花代理の代わりに、沢井代理。

「 伊藤さん。この通帳についての定期の解約つて、どうやるんですか？」

川村は話しかけやすい為か、信治になんでも訊いてくる。

「 まず、普通の定期預金の解約と同じように」

信治にとって、後輩ができたのは嬉しいことだった。

川村優奈小柄で、まだ子供っぽい顔をしている。

見た目とは裏腹に、負けん気が強く、頑張り屋だ。

「伊藤君。酒は好きかい？」

寺道も小柄で、信治にとつても話しかけやすい人だ。仕事はそれなりにできるが、おつかれさうになどもあり、たまに変なところでミスをする。それもまた、彼の柔らかいイメージにプラスとなっていたりした。

「酒が好きといつより、飲んでるときの雰囲気が好きですかね。」

二人はすぐ仲良くなつていた。

この二人は全く問題はない。問題なのは、沢井代理だ。

「伊藤、ちょっと。」

沢井代理は、優しい声と笑顔で信治を呼び出す。

「お前、今月ローンの案件いくつもつてきた?」

「まだ、無いです。」

「無い!?お前なあ、両替やら入金やらやっても意味ないんだよ。お前の給料、どうやって稼いでると思う?」

「ローンの利息、とかですかね。」

「そりだろ?だつたら金借りる先、見つけてこなきや話になんないよな?」

「 はい。」

「 だつたら、やじのねまおちやんの家とかで、ゆくへつしてゐるマなんて、なによな?」

「 はい。」

「 お前、一番取つやすこローンはなんだ?」

「 カードローン、ですかね。」

「 だよな。どうせひとつへくる?」

「 持つてない人に、どうどん勧めてこきます。」

「 わかつたら、やれ。」

「 はい。」

沢井代理は、完璧な作り笑いで、いちいち疑問系で、わかってる事を長々と説教していく。

これは 腹が立つ!!

(やつてゐけどれないんだよ!! いちいちわかってる事言つんじやねーよ!! 上司なら、部下にやる気でやる気にな言つて方しろつてんだよ!!)

と信治もキレ氣味だ。

（はあーあ 野田さんは良かつたな。実になる怒り方してたからなあ。沢井代理、なんだありや。本当にやる気無くなりそうだよ。）

同じ怒ることなのに、何かが違う。確かに野田に怒られ、信治もムツとしていた。が、沢井代理に怒られた時は、ムカツ！…とする。この差は何だろ？

やはり、人を育てようとして言う言葉と、ただ頭にきて言う言葉とは、言われた人の受け取り方は違うようだ。

「あの頃は良かつたなあ 」

アパートに帰つた信治は呟いた。

「家族みたいに思えたもんなあ 」

たつた一人、会社に嫌な人がいる。それだけで、会社に行くのが、恐ろしく嫌になる。

信治は今それを痛感していた。

そんなある日、信治の好きな着メロが鳴つた。
克也だ！

「もつしー。」

「おう、信治か。」

「そりゃあね。」

「おう、久保の話聞いたか？」

「あいつがどうかしたのか？」

「ああ、久保のやう、結婚したつてよ。」

「結婚！？あんなヤツがよくできたなあ。」

「聞いた話だけど、久保、昔から金もちじやん。」

「そうだね。」

「それ田辺へりじいぞ。」

「金田辺へりじいと？」

「そう。」

「そんなんでいいのかよ。」

「かわいいからいいんだってさ。」

「へえー。」

「もうすぐ、子供も産まれるやうだ。」

「ふーん。まあどうでもいいけどね。」

「まあな。んじや、それ聞いたかつただけだから。」

「あつせつなの?」

「わい。じゃあね。」

「はいよ。」

電話を切つて考えた。

「妻に子供、家族か　　ハハツ、ハハハ。なんだ、金で家族、手に入るんじやん。そつか　　結局金かよ！！」

金で買えないものなんて　　ないんじやないか？

信治の頭の中に、イヤな予感が走つた。

希望の花のつぼみは、その花を開く事無く、静かに散つていったの
だった。

「うーー 寒い寒い。」

目が覚めるよしき鮮やかな紅葉も終わり、心も体も凍えそつた風が吹く秋の夕暮れ。

そんな中一人、ショッピングモールの駐車場で震えてたのは、加藤さんだ。

その人は二十代半ばの女性で、信治の集金先のお客さんであった。

「あれ？ 加藤さん。何してるんですか？」

その日休みだった信治は、たまたまそこで出くわしたのだった。

「あっ、伊藤さん。今日休み？」

「わつですよ。田羅日ですもん。」

「いいなあ、こつちはむしろひつじつつの。」

「ハハハ、稼ぎ時ですもんね。今仕事終わつたとこですか？」

「そつなんだけど、迎えが来ないんだよなー。まったく、何やつてんだか！」

「田羅さんですか？」

「そつ！約束の時間過ぎてゐるのに来ないし！ケイタイとまつてゐるから連絡つかないし！こんなに寒いのにーあーイライラするわ！」

「それはお氣の毒に でも、イライラしてもしようがないから、プラス思考でいたらいいんじゃないですか？」

「こんな状況で、どうプラスに考えんのよー。」

「そうですねえ 例えば、空を見るとか。なかなかゆっくり空を見める時間なんて無いじゃなしですか？この白い雲がゆっくり流れていぐ様子とか見ると、意外と心地よかつたりしますよ なんてね。」

「 ありがとう。考え方わ。」

「ではまた。」

「うふ。」

信治がいなくなつた後、加藤は空を眺めてみた。

「空ねえ 空つて、こんなキレイなものだつたかしら 。。」

それはどいまでも青く、どいまでも広く、まるでイヤなこと全て吸い込んでくれたかのよつこ、心を和ませたのだった。

信治が仕事で廻る学校に、信治のメッチャクチャタイプの女性がいた。
名前は、松本恵子。
まつもとけいこ

顔は小さいが目が大きい。
体は小さいが胸が大きい。

完璧だった。その学校で会う度、一人はよく会話をしていたのだが、ある日話が弾んで、今度一人で食事に行こう！なんてことになつたのだった。

信治にとつてはまたとないチャンス！しかし相手がどう思つているのかは、全くわからない。

信治は悩んだ。

（初めての食事会だ。変な事は言わず、普通に楽しもう。いや、せつかくのチャンスだ。せめてメールアドレスくらい訊いとこう！いやいや、こんな機会もう無いかもしけない。思い切つて告つてしまえ！！　どうしよう？）

そんなとき、こんなとき、持つべき者はヤツパリ友達だ！

「で、いつ会うんだ？」

克也はいつものように、信治のアパートで酒を飲んでいた。
もちろん信治もだ。

「今週の日曜日。」

二人とも金に余裕がない為、いつも通り安い酒と、簡単なつまみだけでの宅飲み。

それでも十分だった。

「告つちやえれば？」

「そう簡単に言つなよ。一人きりでメシ食つだけでも緊張するだらうし。」

「でも好きなんだろ？」

「うん。」

「人生いつどうなるかわからないし、やらないで後悔するより、やつて後悔しろ！ってな。自分から動かなきゃ、始まらないものもあるんじやないか？」

その言葉は、信治のくすぶつていた心に、強い真っ赤な意志の炎を燃え上がらせたのだった。

決戦の朝。信治は持っている服の中で最高の組み合わせを選び、車へと乗り込んだ。

途中で例の彼女を乗せ、その時点で元へ、信治の緊張は最高潮に達していたのだった。

そして

「僕と、付き合つて下さい！」

意外とすんなり言つことができた。

彼女は突然の告白に驚いていたが

「で？どうなった？うまくいったのか？フリレタのか？？」

電話の向こうの克也は大興奮だ。

「ダメだった。」

「 そうか。」

一気に興奮が冷めた克也。
それを確認して信治が一言。

「ウッソだよーん！」

「はあ！？なに？じゃあ付き合えたのか？」

「そうー。」

「んだよー。いらなくへ」こんだじやねーかよーふざけんなー。」

「ハハハ。まあ克也の励ましのおかげかな？」

「そりゃそうだろー。今度なんかおーれー。」

「いいよ。」

「で、彼女に会わせろー。」

「いいよ。」

電話越しにトランシッターが上がる一人。
しかし、その一人の約束は、叶わなかつた。

「はあー? 東京に行くつてー? こつよ。」

「明日。」

「明日ー?」

信治が驚くのもムリはない。あの電話から一週間も経っていないのだ。

その日も電話で、結局会つこともないまま、克也は東京に行つてしまつた。

「毎度様ですー!」

「やあ、こりひしゃー。」

鈴木のおじこちゃんはこつものよつこ、定期積金の証書とお金を持って來た。

「 よし、と。まい、じつめ。」

信治がパパッと仕事を済ませると、鈴木さんは妙に信治の顔を眺めていた。

「あれ?なんかついてます?」

「いやいや、いつもより表情が明ること思つてね。これは 女ができたな。」

さすが、長く生きているだけあってか、鈴木さんは見事に面に当ったのだった。

「え わかります?」

「はつはつは、何となくな。まあいいじゃないか。隠すことでもないだろ?」

「はい。」

「でも慎重にな。」

「何を、ですか?」

「『幸せは女から、不幸も女から』って言つてな、幸せも不幸も女房しだいってことだ!」

「まだ結婚するって決めたわけじゃないですよ。やつのことわざですか?」

「アルジエリアだよ。」

「へえー、いろいろあるんですね。」

「それからな、『女心は南風』って言つてな

と、女に聞すことわざをたくさん聞かされ

（まだ付き合つたばかりなんですが）

なんだか頭が痛い信治であった。

「『めんくだせー』。」

「あら、シンちゃん。こらっしゃー。」

佐藤のおばあさんは、当たり前のよつて匂い飯を出してくれた。

「いただきます！」

信治は喜んでそれを頂いた。

「シンちゃん、なんか良いことあった?」

「わかつます?」

「顔に書いてあるよ。」

「実は最近彼女がでאורחして。」

「ふふふ、やつぱつね。」

(やべー バレバレだ ちつと隠れて入れて。)

しかしお次のお家でも。

「あら、風信せん。なんか良いくことでもあつました?」

(はつや??.?.?)

信治の心境は読みやすいうらしー。

「ふーん。」

電話越しの克也の声はなんだか暗い。

「そしたら、アザラシがケイちゃんの側から離れなくなつてさー。」

対して信治のテンションは高い。

「へえー。」

「アザラシも可愛かつたけど、その時のケイちゃんの顔は、マジ、可愛かつたなあ。」

「まーー。」

「なんだよー。さつきから適当な返事ばっかしゃがつてー。」

「そりやあ信治のノロケ話ばっか聞かされたら、返事も適当になるわい！」

「わつか 素直にゴメン。」

「 謝られてもなあ。」

克也が東京に行ってから、一人は今まで以上に電話やメールをするよくなつた。

いつもそんなんだと、全然遠くにいる気がしないもんである。

「ところで、そつちはどうじよ。」

「どうりても 別に。」

「言葉が通じなかつたりとか、ないの？」

「あーーーそれはあるあるー。」

「どんなん？」

「普通マンガ本は『マンガほん』だろ？」

「そりやあ『マンガほん』だわな。」

「違つんだよー。『マンガほん』なんだよー。」

「なにーー!? いや、『マンガほん』でしょ!」

「違つんだって!』『マンガほん』なんだって!」

いつも気付けば長電話。今日は信治からかけたから、もしかしたらその分電話代がかさむ。ギリギリ生活の信治にとって、それはけつこうな痛手であった。最近『ケイちゃん』と呼べるようになつた彼女と、水族館に行つたのも痛い。

でも信治はそれでいいと思つていた。親友との話。彼女とのデート。これ以上ない贅沢な時間に金を使つていてるのだから。

「では、伊藤君。お疲れ様です!」

「お疲れ様です!」

と乾杯して、伊藤と寺道はビールを飲む。

だいたい一週間に一度は、いつも一人で飲みに来ていた。

「どう? 彼女ができる。やっぱ楽しい?」

「はー、そりゃもう。」

「そりかあ、いいな。僕にも誰か紹介してよ。」

「うーん 誰かいい人いるかな どんな人がいいんですか?」

「僕より一個か二個年下たで、かわいければ誰でもいいよ。」

「寺道さんの一個か二個年下ってことは、一・二十八、九ですか
知り合いにいるかな？」

「期待しますー。」

「うーん。」

いつも割り勘。たまに寺道がおうりてくれる。
だがこの日だけは、信治のおごりだった。二人でパチンコ屋に行つ
て、信治だけ勝つたからだ。

「たまたまいに台に座つただけですよ。」

「伊藤君、スロット強いよね。田押しもうまくなつたし。」

寺道によく誘われるので、信治もすっかりパチンコやスロットに詳
しくなつてしまつた。

「関係無い話だけど、伊藤君、そろそろ二十歳だつけ？」

「はい、あと二カ月ですね。」

「二十歳になつたら、金借りれるよ。」

「いや、怖いから借りないですよ。」

「便利だよ。こぞとこづときの為に作つておけばいいの。」

「えーーー? イヤですよ。」

「簡単にできるんだよ。ほら、新町の電気屋の近くにこっぽいある
じやん。あのハコに入つて、三十分もあれば」

「作りませんつて!」

寺道はすぐ変なことを教えてくる。

それでも信治は寺道を慕つていた。友達でもない、兄弟でもない。
だが一人の間には、互いを助け合い、励まし合つて生まれた堅い絆
があつた。目には決して見えない、絆というもので繋がつている
少なくとも信治は、そう信じていたのだった。

早いもので、克也が東京に行つてから、もうすべ一年が経つ。
結局、ゴールデンウイークもお盆も、克也は帰つて来なかつた。
それでも、二人の関係が壊れる事はなかつた。むしろ、離れていて
も常に連絡を取り合つていると、逆に結束力が強まつた気がした。

そんなある日

いつものように、仕事が終わつてから克也の電話。
いつものように、陽気に電話に出る信治。

しかし、電話の向いの克也は、いつもとは様子が違つていた。

「信治ーー..どうしよう..助けてくれーー！」

「な、なに?ビリした?」

「ハアー 信治 人ひいちまつた。」

「はつー?車で!?

「ああ。」

「それで?」

「どうあえず示談で済んだんだが、その、金が。」

「いくへりょ。」

「三十万。」

「三十一? さすがに、それは」

「無理だよな。」

「うん 待てよ?」

信治は思い出していた。寺道が言っていたこと。金の借り方を。

「克也ーーいつまでだ?」

「明後日。」

「 よし、わかつた！俺が何とかする！何とかすからな！待つてろよ。」

次の日。

信治はわざわざ、寺道が言っていた『ハ』の前へやつて來た。

「なんか 緊張するなあ 。」

なんだか『入つてはいけない』オーラが出ているのを感じながら、それでも信治は足を踏み入れた。

当たり前かもしれないが、中には誰もいない。機械と、用紙と、ペンがあるだけ。

信治はホッとした。

機械の言うとおりに、用紙に記入、簡単な機械の打ち込み、そして免許証のコピーをした。

やがて審査が終わり、カードが出てきた。
本当に、三十分足らずで出来てしまつた。

カードには、三十万の申込みだったのに、五十万までの限度額がついてきた。

しかも、それを今すぐ、全部引き下ろすことができてしまつのだ。

「なんて便利！　じゃねーよな。なんて恐ろしいんだ。全く！　
　　ハア、借りてしまった。」

人生が一段階悪い方へ進んだ。そんな気分になつた。

「　つてことで、送つといたからな！」

「マジで！？いやーホント、わりーなー。」

「いいんだよ。困つたときはお互い様、俺ら親友だろ？」

「ああ、ありがとな。必ず返すから。毎月少しづつでも、必ず返す
からな！」

電話をする信治の隣には、恵子がいた。

彼女には隠し事はしたくない。

信治は借金をしたことも、そのワケも、ちゃんと彼女に伝えていた。

「でも大丈夫？三十万なんて大金、返つてこなかつたらどうするの
？」

「大丈夫だよ。あいつは親友なんだ。ちゃんと返してくれるさ。」

「でも、金の貸し借りで友情が壊れる事つて、けつこうあるみたい
よ。」

「 大丈夫。金なんかで僕らの友情は壊れやしないよ。金なんか
で 。 」

金 正直、信治は自信がなかった。しかし、幼い頃から知つてい
る克也なら、きっと大丈夫。きっと大丈夫だと信じていた。

ギリギリ生活の信治に、さらに毎月の利息を払う余裕なんて、ある
ワケがない。
ならどうする?

答えは簡単。まだ残つている限度額、一二十万から少し下ろして払え
ばいい。

だが、そうやって払つていれば、もちろん借金は増えていく。
あつという間に、五十万手前まできてしまった。

信治が金を貸して、次の月も、その次の月も、さらに次の月も、克
也からの入金はなかつた。

それどころか、メールも返つてこない。電話にも出ない。
そうしてさらに三ヶ月が過ぎた。

「 克也 何やつてるんだー! ? 」

信治はダメもとで、もう一度克也に電話をかけたのだった。

「おかげになつた電話は、現在使われておつません。番号を確認のつい、もう一度」

それは、東京のどこにいるかもわからない克也に、連絡を取る方法が全くくなつた事を意味していた。

信治はそこで、そこでようやく気が付いた。

金の返つて来る可能性が、限りなくゼロに近づいたことを。

「 なんだよー克也ーーー. . .

そして、信治の心の闇は、これを機に、一気に加速して広がるべになってしまった。

いつもの職場。
いつもの顔。

ただ一ついつもと違うのは、寺道がやけに元気になっていることだ
った。

「寺道さん、なんかありました？」

「ん？いや、別に。後で話すよ。」

（ はてな？ ）

信治が不思議がっていると、木村係長がこいつぞり教えてくれた。

「寺道な、彼女ができるたらしこだ。」

「なーるほど、どうりで。」

（ そ、うか、僕も彼女ができる頃、あんな感じになつてたんだな。
うーん 恥ずかしい。 ）

寺道は、バカみたいにハイテンションだった。

「伊藤君。僕にもついて、彼女ができるよ。」

「おめでとうございます。」

「なんだ。もつと驚くかと思つたの」。元の

「実は係長からチラッと聞いて」。

「やうなんだ。」

「そりなんです。でも大事にしないとダメですよ。寺道さんにはこんなチャンス、一度とないですからねえ。」

「なんだとおー。」

と、信治をこちよがして笑う寺道。

「ねえ、伊藤君。今度伊藤君と彼女と、僕と僕の彼女と四人で、どこか旅館にでも泊まりに行かない？」

「いいですね！」ホールデンウイークも近いし。あれ？寺道さんの彼女って、なにしてるんですか？」

「ん、フリーーターだよ。」

「じゃあその時なら、みんな休みですよー。」

「じゃあ決まりだな。」

でも信治には心配事が一つあった。金の事だ。

なんとか利息を増やすないでやつてきたのだが、いつもなつたら仕方ない。信治はあることを決めた。もう一枚、カードを作ることを。

「伊藤君。ちよつと来て。」

沢井代理に呼ばれると、何もしていなくても、怒られたような気分になつて、胃が痛くなる。

「はい。」

沢井は信治に、ある紙を渡した。

「いいか、これに名前が載つている人は、みんなローンの延滞先だ。今から行つて回収して来い！」

「今からですか？」

時計は夕方の五時を回っていた。

「田中に回れつて言つても、どうせ回りきれないだろ？」

「はい 行きます。」

確かに沢井の言つことは正しいかもしない が、そう決めつけられてるのもやっぱ、ムカつく！

しぶしぶ信治は外へ出た。

雪は消えても、まだ暗くなると冷え込む時期だ。

「ひひひ 早く回つて終わらせよ。」

まあ一軒田。

「「」めんぐだれーー。風信ですが。」

「ああ ローンの事だろ?」

「はー。」

「いやーすいませんね。今週ちょっと使う用が出来て 来週には
払いますんで、それまで待ってくれませんか?」

「わかりました。来週ですね。」

一軒田。

「「」めんぐだれーー!」

しーーーん

「「」ごばんはー!」

しーーーん

(「いなーい?留サ?~電気まつこしてるナビ?~まつ、こいつか。」)

「「」めんぐだれーー。」

一軒田。

「はいよ。」

そう言ひて出てきたのは、田村さん。白髪でアボアボのおじいちゃんだ。

「あつ、風信ですが、ローンの支払いをお願いしに来ました。」

「 そうか。ふー 見ての通り、年寄りが一人暮らしているだけ。家もボロボロ、食つのもままならね。今払うのは無理だの。」

田村の言ひとおり、家は地震でもきたら潰れそうだ。家の中を見て、金田になつそうな物は一つもない。

「では、いつなら払えますか?」

「年金が入るまで待つてくれんか?」

「すると 来月ですかね。」

「 そうだの。」

タタッと何かが走る音がして、信治が振り向くと、そこには全身真っ白なネコがいた。

「田村さんのネコですか?」

「ああ。今では唯一の家族だの。」

「かわいいですね。来い来い!」

「やー、とネコは信治の元へやつてきた。

ネコのあごの下を撫でてやる信治。

よく見れば、ネコの毛は汚れていた。白ネコのハズが黄土色に見えた。

た。

「じゃあ、また来月来ます。」

信治は、それから数軒回つて会社へと戻った。

「なにーー!? 一つも回収できなかつたのかーー!」

「はい。みんな金が無いよつで。」

「はーー それじゃあこつまで絆つても回収できなーいだろ? うだり?」

「はい。」

「それをなんとか回収して貰のが、お前の仕事じゃないのか。そ

「じゃあ明日、また行つて来いー。」

「はい。」

「でも田村さん、年金が入るまで無理みたいですよ。」

「あのおじこぢやんか。」

「はい。」

「じゃあどうやって飯食つてんだ?」

「?」

「確かネコも飼つてたよな。」

「はい。かわいいネコがいました。」

「ネコ飼つ余裕があるのに、ローン払えないのはおかしいと思わないかい?」

(いや、ネコだつてガラガラだつたし おかしいなんて思わないけどな。)

「いいが、ネコと、自分と、飯食つ金があるなら、それをよこせと言つてこーーー」

(それじゃあ生きていけなーじゃんー)

「わかったのがーー?」

「はー。」

次の日も、信治は延滞先を歩かされた。

「 どこへ行けなんで、延滞分払つて預けますでしょ。」

「 まつたくーあんたらま、金貸す時はあんないい顔して、ちょっと
払えなくなるとすぐ取り立てに来るーふざけんじゃないわよー。」

「 すこません。」

「 はー わて次は 田村さんか。」

「 」んばんは。」

「 あれ、また来たのか。来月まで払えんと、言つたハズだがの。」

「 やつなんですが、その あの、やつやつて飯食つてつてま
すか?」

「 は?」

「 あ、飯食つていぐ金があるなら、それを貰おうかと。」

「 じやあワシらに死ねとー死んでも払えと誓つのかー。」

「 こや、やつは行けでは 。 。 」

「 帰つて預けますか!」

「 。 」

トボトボと帰る信治。

「なにー? もうえなかつたじゃないだろ? 延滞するヤツはそりやつて、ずっと延滞してくんだよー。払うまで毎日行つて来い!」

「 」

沢井の言葉が、信治の心にむりに追い討ちをかけてくる。

「毎度様です。」

「 おや? なんだか元気がないな。なんかあつたな。」

鈴木のおじいさんは、まるで人の心が読めているかのようだった。

「 いや、大した事ないんです。」

「 スリランカのことわざでな、『小川はけつして海にはならない』というのがある。小さなものは大きくならない。頑張つてもどうしようもないこともある。だから小さな悩みにクヨクヨしても仕方がないってことだ。」

「 頑張つてもビリシヨウもないこともある、ですか ありがとうございます。」

何も知らないハズの鈴木の言葉は、信治の中のモヤモヤを、ほんの

少しだけ取り除いたのだった。

でもそのほんの少しのおかげで、その後の仕事は明るく回ることができた。

さて、五時を回り

「「めんくだわー。」

田村の家だ。

「君か まあ入りなさい。」

田村は初めて、信治を玄関より中へ入れた。

「昨日は悪かったの。追い帰したりして。」

「いや、じぢぢじわすいません。失礼な事を言つて。」

「君ら、上の指示で動いている者に、文句を言つのは間違いだ。それくらい、わかつてはあるんだがの。」

「あの、なんで借金なんかしたんですか?」

「息子の借金だ。」

「え?」

「息子の連帯保証人になったのはいいんだが、払えなくなつてどこか行つてしまつた。」

「どうしてるかも、わからないんですか？」

「やうだの。」

「。」

「息子がいなくなり、やがてワシも働けなくなり、残ったのは借金だけ。自分の子供の事だ。仕方ない事だ。」

「そんな。」

「もつ働く」ともできんし、飯食つ金ももつてかれるなら、もつクビでも吊るしかないの。」「！」

「やつ、そんな、そんな事言わないで下さいーなんとか延ばせるよう話して来ますからーそんな悲しいこと、言わないで下さいよー。」「！」

「お前さんは、いい人だの。明日、またこの時間に来なさい。待つとるよ。」

次の日、約束の時間。

信治は田村の家の前にやつて來た。

だが、信治の足はそこで止まってしまった。

本当にクビを吊っていたら そんな事が、頭から離れなかつたらである。

「「」あんぐだわ。」

恐る恐る、信治は玄関のドアを開けた。

「やあ、待つてたよ。」

田村の声を聞いて、ホッ と力が抜けた。

「ほひ、これで足りるじゃね。」

田村が差し出したのは、金だった。

「 足ります 足りますけど、どうやって?」

「お前さんと言われて、恥を覚悟で近所の家を回つての。なんとか
借りる事ができたんじや。」

「そりなんですか 良かつたあ。僕は本当にクビ吊りでもしてゐ
かと思つて、本当に心配したんですよ。」

「お前さんのような若い人に、そんな嫌な思ひはさせんよ。人間、
その気になれば、なんとなるもんだの。」

田村はそり言つて笑つた。

ネコも近づいてきて、笑つてゐるように見えた。
信治も笑つて 少し泣いた。

「わー、着いたね。」

「いい所ですね。」

「景色きれい。」

「ホテル大きいねえ。」

信治と恵子、そして寺道と、その彼女の良江は、四人で泊まりがけの旅行に来たのだ。

ゴールデンウイークの為か道が混んでいて、けっこつな時間を要した。

そんな中現れたこの景色、四人の疲れを一気に吹き飛ばすほどだった。

青々とした木々のざわめき。澄んだ川の流れ。遠くに見下ろす街並み。ほんのり冷たい空気を運ぶそよ風。とにかく絶景と呼ぶにふさわしい場所であった。

さて、夕食はバイキング。

寿司やステーキ、刺身、タラバガニ、スペゲティやチャーハン等々どれも高級そうで、どれも美味しそうな食べ物が、全部食べ放題！みんなのテンションは一気に上がった！

そんな中、信治が大量に持つてきたのは、なぜかゆで卵

(こんな高級そうな食べ物に囲まれてるんだ。きっとゆで卵も、超美味しいハズ。)

そう思ったのである。

しかし

(やべえ 超普通だ)

ゆで卵で腹が一杯になり、他に手が出せなくなる信治であった。

さてさて、夕食が終わり、みんなは風呂へ。

これまた景色が最高の大浴場で、それぞれテンションが上がる一方 だった。

夜は四人集まつて酒を飲んだ。

とにかく寺道が上機嫌で、恵子も、良江も、みんな楽しそうだ。

やがて女性一人が寝てしまふと、信治と寺道は窓辺のイスに座り、二人だけで酒を交わした。

「寺道さん。仕事、辞めたいと思つた事はありますか？」

「僕なんか、ショッちゅうへマして怒られるからね。その度に辞めたいって思うよ なんかあつたのかい？」

「なんか、仕事つていうことが、よくわからなくなりました。俺、仕事は人の為になることだと思ってたんです。人と人が助け合つて生きていく。そういうことだと 。

でも最近は、そうは感じない。金持ちにペコペコして、金が無い人に取り立てに行って そんなの、ただ会社の為にしかならないじゃないですか！－結局、金の無い人は苦しいままじゃないですか！！

金持ちは偉そうで、そんなんじゃ、世の中良くならないじゃないですか！！　俺は、そんなの嫌です。」

「確かに、金持ちは偉そうのが多いね。でも、中にはそういう人もいる。金持ちでも、すごく優しい人もいるし、貧乏でも、コツコツお金を貯めて、風信さんのおかげで助かって、そう言ってくれる人もいる。

僕はそういう人がいるから、まだ辞めないで頑張れるのかもれない。でもね、伊藤君が辞めたいなら、辞めればいい。まだ若いし、いろんな経験をする事は、とても大事だと思う。自分で選んだ道に、間違いないんだから。どの道を選ぶかは自分次第。後悔しても、失敗しても、自分で選んだなら納得できる。そしたらまた、次の道を探せばいいだ。」

街を見下ろす高い部屋。夜景がとてもきれいだ。信治の畳に映る夜景は、光がにじんで、やがては見えなくなつた。

いつからか目が覚めていた恵子は、一人の会話をコツソリ聞いていた。盗み聞きしていたワケではない。ただ、一人の邪魔をしたくなかつただけだつた。

朝、四人は帰り支度をしてロビーに降りた。

「ねえ、コレ買つてよー。あと、コレも欲しいなあ。ねえ、お願ひ。

」

良江が、売店で何か欲しいものを見つけたようだ。

「わかったよ。しょうがないなあ。」

寺道は、言われたもの全てを買ってあげていた。

信治は感じていた。イヤな予感を。

「いやあ、この前は楽しかったね。」

「また行きたいですね。」

旅の思い出話は、何年経っても楽しいものである。寺道と信治は、久しぶりに一人で飲んでいた。

最近付き合いが悪くなつた寺道。毎週一度はやつていた飲み会も、今は月に一度有るか無いかである。

「ねえ、伊藤君。お金に余裕ないよね?」

「え? あるわけないじゃないですか。」

「だよねー。」

「んー。」

信治が目を覚ますと、もう毎の一時だ。ひどい一日酔いの中、なんとか起き上がった信治は、隣にいるハズの寺道の姿が無いことに気が付いた。

「あれー 寺道さん？」

どこにもいない。そして、なぜか信治のキャッシュカードがテーブルの上に置いてあった。

まさか！

信治は急いで電話をかけた。相手はもちろん寺道だ。

（そういえば、やたらカードの残高を訊いてきていた。酔った勢いで暗証番号も教えた気がする。でもまさか そんなハズないよね？ 寺道さん。）

「もしもし？」

「 伊藤君 ごめん。」

その瞬間、信治は理解した。同時に、心がバキバキと音をたてて砕けるのを感じた。

その後寺道が言った言葉。信治はあまり覚えていなかった。

彼女がどうしても、東京に行きたがっていると言った事。

そのため、アパートを借りる資金が必要だったと言った事。

ちゃんと相談したかったけど、言えなかつたと言つた事。

絶対返すから、と言つた事。

本当に「めんと、何度も謝つていた事

信治には、もうどうでもよかつた。ただ自分で、最後に口にした言葉は覚えていた。

「いいですよ。前にもそんな事あつたんで。返さなくともいいです。あげますよ。ただもう一度と電話しないで下さい。メールもしないで下さい。」
「よしなさい。」

ピッ、と電話を切ると、早速寺道からの電話を着信拒否した。アドレスも変えてしまった。

寺道が勝手に持つていった金は、三十万。カードは一気に限度額近くまでいった。それでも信治は焦らなかつた。

また新しくカードを作ればいい

ただ、そう思つたのだった。

「ケイちゃんは何が見たい?」

「うーん アクション映画もいこなだ、いつかも見てみたいし
信治は?」

「僕はケイちゃんが見たいのなら、何でもいいだよ。」

「じゃあ 「コレ」するー。」

「 んじ 信治ー。」

「ん? ああ、あれ! ? 寝ちゃったのか ビックリだつた? 映画。」

「面白かったよ。後半は。もう、寝ないで見てればよかつたの。」

「「あー」めん。途中つまんなくて、いつの間にか寝たみたい。」

「んーー。」

「腹減ったな。」

「なんか食べよつよ。」

「何がいい？」

「いろいろあるねえ 寿司もいいけど中華もこいし あつー・ラーメン美味しいやつ。このカツも食べたいなあ。」

「で どれにすんの？」

「信治は？」

「僕はなんでもいいよ。」

「じゃあ、ラーメンにする。」

「うん 美味しい！」

「さすが！ケイちゃんの選んだ店に間違いはなかつたね。」

「でしょ？ふふふ。」

「」
「まかせとけーーー。」
「」

「…………んー、無理ー。」

「じゃ、コレは?」

「それはいけそう…………ダメだ。」
「いや。」

「私やつてみる。」

「無理だつて。」

「…………うまいね。」

「取つちゃつた。」

「なんか悔しいな。よし、アレ取つてやる。」

「取れた?」

「うるせーーー取れねーよーーー」

「ふふふ。私の勝ちだね。」

「じゃあ、ボーリングで勝負ー。」

「…………いじよ。」

「よつしゅー・ストライクだ。どつよ?」

「んー 真つ直ぐいかないよ。」

「投げる時に、手が曲がってしまうからダメなんだよ。」
「どうやつてだな。」

「やつたーー勝つたーー！」

「ガーン。負けた ちくしょつ。 いうなくアドバイスするんじや
なかつた。」

「負けたから罰ゲームだよ。」

「えーーー? 聞いてないんですけど。」

「勝負に罰ゲームはつきものよ。」

「いいよ。何すればいいの?。」

「私のことを、どう思つて居るか言つて下さん。」

「 いいで?」

「うん。」

「やだよー。恥ずかしい。」

「さつさく、こ ciòよつて言つたじやないー！」

「わかつたよ。」

「ちやんと目を見て、真剣に言つんだよー！」

「僕は、ケイちゃんのことを、心から愛してますー。」

「それが真剣？」

「さうだよ。僕の本気の気持ちだよ。」

「ちやか。」

「あれ？ダメだった？」

「つづん。次、何する？。」

「水族館かあ。」

「イヤなの？」

「そうじやないけど 前來たじやん。それに金も少ないしー

「私も払つから。ねつ、行ῆじつ。」

「わあ 魚がキレイ。」

「うん。」

「あつ、ウミガメだーほら、超巨大いよー。」

「もうだねえ。」

「 なにその反応。つまんないの?」

「いや、」の水族館そんな大きくないから、全部頭に残ってるんだよね もうだ！アザラシとかペンギンがいるとこ行ῆうよ。あれなら何度見てもかわいいから。」

「ほらかわいいー。」

「確かにコレは、ずっと見てても飽きないね。」

「あつ、」のペンギン飛び込みそひ。」

「ホントだ！ なかなか飛び込まないね。」

「後ろからもう一匹来たよ。」

「あつ、押した！」

「あはははは 落とされちゃった！」

「かわいそー！」

「ねえ、そりそりイタルカのシローが始まるよー。」

「行こつか。」

「うん。」

「わあおー。やっぱイルカはすこいなあ。前見たのと、ちょっと変わつてるねー。」

「うん。」

「びびった？なんか泣きそつた顔して。つまんない？」

「うん。そんな事ないよ。そんな事ない。」

「？」

「よし、帰るか！」

「うん。」

「。」

「。」

「なんか、歌でも聞くか。ノリノリのヤツがいいかな
ん何が聞きたい？」

「静かのがいい。バラードとか。」

「よし！じゃあ僕の、激選バラードMDをかけよう。」

「。」

「？」

「着いた！ 今日は楽しかったね。」

「うん 楽しかった。ありがとう。」

「なんかあつた? 今日のケイちゃん、様子が変だつたよ。」

「私たち 別れよう。」

「…?え?なんで?どうしてそんな」

「信治は、私に本気じゃない! いつも合わせてるだけ。信治は、私のことを好きじゃない! 信治の心の中には別の人かい。本当はその人を想つてはいるから、私がどんなに頑張つても、信治は私を見てくれないのよ!」

「なんで勝手に決めつけてんだよ。そんな そうか 金か! 金が無いからイヤなんだろ! 貧乏人とは付き合えないんだろ! 水族館代すら払えなかつたもんな。さては始めから金田当てか! 信用金庫で働いてるからな! 金があると思つたんだろ! 悪かつたな、給料少なくて。理想と違つたつてワケだ!」

「そつよー金のない男なんて最低よ! ガッカリしたわ! セヨウなら。」

そう言つて恵子は、車から降りて歩き出した。

信治は興奮して、何も考えなくなつていたようだ。
恵子が泣いていた理由すら、気づかなかつたのだから。

土曜日。

信治はパチンコ屋にいた。

（よし、チリーダ！入れよ
よーふざけんなー！）

信治はスロット台を、ガン！と一発叩いて席を立つた。

（あーあ、金ねえなあ また引き出しつくっか。）

「おーーじじいどけよーひき殺されてーのがーー。」

信治は苛立つっていた。

スロットを打つていても、運転していても、そして仕事中
も

「なんだか最近元気がないねえ。大丈夫かい？シンちゃん。」

「なんか、どうでもよくなつてきました。なにもかも。」

大好きな佐藤のばあちゃんの前ですひ、口クに笑顔も出せなくなつ
ていたのである。

その日の仕事が終わり、信治はふらつと自販機まで歩いた。
タバコの自販機だ。

そして吸わないハズのタバコを一つ、適当に選んで買ったのだった。

「あー 遅せー そんなトロトロ運転するなり道のぞれよなー。」

信治は前の車を、思いつきりあおつていた。

「遅いじゃないーなこやつらのよー。」

（ほら遅くなつたから怒られる。つたぐ、ひるせーんだよ川岸のバ
バア。）

「だから電話で言つたじゃない！早く来てくれないと

(うなぎ。)

「おい、伊藤ーお前今月もローン取つてないよな？やる気あつてんのか？ん？」

(いぬせえ よ沢井 あ———いぬせえ———!)

「バン！－！」と強く扉を閉め、信治はアパートに帰ってきた。

「はあ
疲れた。」

そう言って信治は、飯も食わずに布団に倒れこんだのだった。

ある土曜日の夜。

信治は飲み屋街を、ブラブラと歩いていた。だが、一人ではどうも入る気になれない。

(帰ろかな。)

そう思つた時だった。

「 こじちゃん！ ちょっと一緒に飲もうよ。 」

「 イヤです！ 離して下さー。 」

そんな男女の声が聞こえてきたのだった。

(あー つむせえな あ 。)

今の信治にとって、そんなのどうでもよかつたのだが、何気なそつちを向いて驚いた。

「 ケイちゃん！ 久保？ 」

(なんだ？ この組み合わせ。)

そう思つた。

ほつといて通り過ぎたかったのだが、向ひつも信治に付いたようだ。

「 信治ー。？」

「おめーなんで一人でこんなトコにんだよ。ってか、お前ら知り合
い?」

(あーあ なんかめんどくわそつ。)

信治はしぶしぶ一人に近付いた。

「ナンパでもしてんの?」

「やうだよ。わりーが?」

「いや、でも嫁子供いたよな?」

「もう別れたよ。あんな女!」

「ふーん。」

「とにかく、今いとこなんだから邪魔すんなよ。」

(ビ)がいとこなんだか ってか、邪魔つてなに?・俺が邪魔しに
きたつて?)

「信治!助けてよ。」

「なんだ?お前の彼女か?おい、こいつはやめとけ。金ねーぞ!」

(「わるせえ。」)

「俺だつたら何でも買つてやれる!・好きな所に連れてつてやれる!・
なんでもしてあげるよ!・」

「イヤー！」

「いいからちよつと来いよー！」

久保は、恵子の手を無理やり引っ張った。

「イヤーーー！」

恵子は必死に抵抗している。

「ちよつとだけ、なーちよつとだけ付き合つてよー。」

「うるせえんだよーーーどいつもこいつもーーー。」

信治はそう叫んで、久保を一発、思いつきり殴つた！

「いだえ！　うひゅー。」

久保はなんか、泣きながらビコかへ行つてしまつた。

「　ありがと。」

「別に。ただ、じじんといライライしたから、ちよつとよかつたよ。少しスッキリした。」

二人は並んで歩いた。

途中、信治はタバコを取り出すと、火をつけ、フウーーと空に煙を吐いた。

「タバコ、吸つくなつたんだ。」

「最近ストレス溜まつててさ。タバコでも吸いたい気分になつたよ。」

「

「私のせい?」

「いーや。ここ数年いろいろあって もうなんか、嫌になつちやつたな。なにもかも。」

「もうなんだ。」

「どうして久保の誘いを断つたの? アイツ、ホントに金なり持つてるの?」

「金なんか、どうでもいいよ。まだ 信治のこと、好きだし。」

「えー? じゃあなんで僕をつたんだよー。」

「ほり、また『僕』つて言つた。」

「?」

「信治はね、本気で何か言つ時はいつも、自分のことを『俺』つて言つんだよ。気付かなかつたでしょ。」

「うん。」

「信治は、私といふ時はいつも『僕』つて言つてた。私に、愛してゐつて言わせた時も、やつぱり『僕』だつた。前からなんとなくわ

かつてたんだ。信治は私に本気じゃない。ただ独占欲で別れたくないって思つてゐるだけ。ただ私に合わせてゐるだけ。それじゃあの先、上手くやつていけない 信治の心は、違う誰かを想つてゐる。それに気付いてしまつたから、私は 信治と 別れよつて、そう決心したんだよ！」

惠子は、最後泣きながら話していた。

信治は唇をギュッと噛んで、必死に、必死に涙をこらえていた。

「今までありがとつ。楽しかつたよ。」

惠子はそう言つて、一人で歩き出した。

その姿を追いかけれなかつたこと。

それが答えなんだと、信治はようやく気が付いたのであつた。

夜の浜辺に、信治は一人座つていた。

「あら、珍しいわね。」

懐かしい声だつた。

「 ここに来れば、会えると思つてたよ。七海さん。」

「会ったときは、まだ子供っぽさがあったけど なんか大人っぽくなつたね。」

「大人ですもん。」

「年をとれば大人、つてもんではないよ。いろんな経験をして、苦労して、泣いて そうやって人は大人になつていくんだと、私は思う。」

「あのときは、すいませんでした。幽霊なんて信じてなかつたし、ホント怖くて、ショックで」

「今はもう怖くないの?」

「うん。だつて、七海さんは七海さんですから。」

「ありがと。」

「今日は、七海さんに話があつてきました 僕、七海さんが好きです！初めて会つたときから、もう好きになつてたんです。そして、今でも好きです。」

「 私幽霊だよ？」

「わかつてます。でも それでも言います 付き合つて下さーーー！」

「…………」めんなさい。私には好きな人がいた。今でもその人のことが忘れられないの。だから、あなたを好きにはなれないもうここにも来ないで。」

「 ありがとう。」

信治はそう言つて、その場から立ち去るよう歩き出した。

涙が止まらなかつた。

信治はこれから恋に向き合つため、七海につられに来たのだ。

七海はその覚悟を知り、わざと冷たく断つたのだ。

二人が生きているときに出逢つていれば、幸せな未来があつたのか
もしれない

だがそれは無い。

どんなに願つても、時は戻ることを知らないから 。

第八話・夢

金で夢は買えるか。

答えは簡単。

YESだろ？。

すべてのがそうとは言えないが、金が無ければ叶わない夢と、この二つは、少なからずあるハズだ。

信治の妹、春奈は生まれつき体が弱い。その時点で、抱ける夢も限られていた。

それでも春奈は、小学生の先生になりたいと、一生懸命勉強している。

当然大学にいかなければならぬ。

当然金が必要になる。

今は春奈が世話になつてゐる、おじさんだけが頼りだつた。

「おつー春奈久しぶり。」

「お兄ちゃんー！」

「ねえ、この家タバコ吸つても大丈夫だよね？」

「うん、おじさん吸うから。お兄ちゃん、タバコ吸つよひなつたんだ?」

「やうだよ。」

「やめとこった方がいいよ。体に悪いし。」

「それはわかってるんだけど なんていうか 大人になると、苦味がうまく感じるようになるんだな。タバコの苦味、人生の苦味、こういったものを探してしまおうんだな。うん。」

「なに自分で勝手に納得してんのよーまつ、いいけど。」

「おじさんまだ仕事?」

「うん。もうそろそろ帰つて来ると悪いけど。」

「やつか。いや、車のローンもつけよいだから、残りの分全部払つておひつと思つて。」

「じゃあ遅くなるよひなら、私預かつとくよ。」

「やうか、頼むよ。」

信治はもう、誰にも金を貸したり預けたりはしないと決めていた。だが、妹だけは違つた。

自分はもうどうでもいいから、妹だけは、春奈だけは幸せになつてほしいと、心から願つていたのである。

「大学受験そろそろだろ？大丈夫か？」

「うん。お兄ちゃんと違つて、『テキが違つから。』

「うーん、言い返せない。」

「ふふふ。」

「おじさん全部支払つてくれるの？」

「うふ。金の！」とほほかせとカーダつて。」

「わうか。おじさんにはホント、頭が上がらないな。」

「 そうだね。」

「 ？」

帰りの車の中で信治が思つのは、春奈が少しだけ見せたうつむいた顔だった。

（あいつがあんな顔するなんて 何かあつたな。）

信治はまた近づいて、妹に会つて来よつと想えていた。

「 伊藤さん。最近元気無いですね。」

そんな心配をしているのは、信治の後輩、川村だ。

「 シンちゃんも、いろいろあつたからねえ。彼女とも別れたみたいだし。」

話が好きで噂も大好きな木下は、信治にあつたこと、だいたいは知っていた。

「 えつ！？彼女と別れちゃったんですか！？」

「 そうみたいよ。ほら、優奈ちゃん。今がチャンスかもよ。シンちゃんのこと、好きでしょ。」

「 はい。好きです！」

（ 素直だねえ。）

「 じゃあ、頑張って告白してきます！」

と言つて席を立つた川村。

「 優奈ちゃん！なにも今すぐじゃなくても 行っちゃつた 。。。」

一分後。

「つらいましたあ。つらう。」

「よしよし。でもこきなり告つたらダメよ。順序よくいかないと。
これからが勝負よー応援するからー！」

「ありがとうございます。つらう。」

（ こいつ面白ひこな。）

川村が悲しんでいるのをよそに、木下はとても楽しそうだ。

一方信治はといふと 全く興味も何もない。そんな感じに見える。
今の信治に、恋愛や友情といった感情は必要無いのだ。

ただ妹のことだけ、それだけが気がかりなのだった。

「信治、今日夜ヒマか？」

「はい、特に予定もなんもないですよ。」

「たまには一人で、飲みに行くかー！」

木村係長が、珍しく飲みに誘ってくれた。

信治は断る理由もないのに、それに頷いたのだった。

「では、とりあえず 乾杯！」

二人はグラスを合わせビールを飲む。木村は一気に飲み干してしま

い、早くも次のビールを頼んでいた。

「信治、なに食べたい？今日はなんでもおいひでやるのー。」

「えーと じゃあ、シシャモと焼き鳥で。」

「よしわかった！あと俺のオススメも頼んどくからなー。」

仕事のあとで酒は、なぜこんなにも高いのだろうか 二人は次々とグラスを空けていった。

「信治。最近どうだ？」

「どう つていわれましても。」

「疲れてないか？ストレス、溜まってるんじゃないかな？」

「うーん 疲れていますね。風信入つてから、いろいろあつたんで。」

「そうか なにか辛いことがあつたら話せよ！ただ聞いてもらうだけでも、けつこう楽になつたりするからな。一人で抱え込むんじゃないぞ。まあ、こんな俺で良ければだけど。」

木村は、最近元気がない信治が心配で飲みに誘つたのだ。信治も、それはわかつていていた。嬉しかつた。本当に嬉しかつた。でも信治は、何も言わんいつもりでいた。言つたところでは、何も変わらないからだ。

だが、なぜだろう 酒のせいだろうか。木村になら話したい！そう思えてきたのだ。

「俺の両親は、自殺したんです。金のせいです。」

「借金か?」

「はい。俺と妹を残して ショックでした。」

「それはショックだらうな。」

「そのとき思つたんです。なんで金なんかの為に死ななきやいけないんだ!つて。それで探しました。金より大切なものが有るはずだ!つて。」

「それは、見つかったのか?」

「世の中金だ!金があれば何でも手に入る!金が無きや何もできない! 小さい頃、そんなハズはないと思っていました。大人になつたら、金があつても無くても、頑張れば必ず幸せになれると思つてたんです。でも 実際大人になつてわかつたんです。金を得る為に働いて、金を増やす為に頑張つて、金が無ければ金を借りて 人はそやつて生きているんだつて。所詮世の中金なんだつて。けど、金で買えないものもあるんじやないか?金より大切なものもあるんじやないか? 友情とか、愛情とか、家族とか、命とか、そう思つてたんですけど 結局金の方が強いんです。金の力には、なかなか勝てない そんなことを考えてたら、いつの間にか俺も借金だらけになりました。今ならわかります。両親がなぜ自殺をしたのか。金の無い苦しみ、辛さ これは本当に金が無くなつたときにしかわからない。」

死んだ方が楽なんぢやないか？つて、本氣でそう思えてくる。

本当に、苦しいもんなんだつて。

両親と住んでいた家の近くに、灯台があるんです。断崖絶壁に建つていて、そこからの眺めは最高なんです。もし、そこから飛び降りたら、死ねるかな、とか そう考えたこともあります。でもまだ、体の弱い妹が心配で。あいつが夢だった先生になつて、結婚して、幸せになつて それを見届けるまでは、死ねない！なんて勝手に決めてたりします。」

「 そうか 確かに金の無い苦しみは、実際なつてみないとわからぬいかもな でもな、信治。男なら、探したものは見つかるまで探せ！途中で投げ出すんぢやないぞ！そして見つかつたら俺に教えるよ！俺も気になるからな。それまでは、勝手に死ぬ事は許さん！わかつたか！」

木村の言葉は、広く、優しく、それでいてズシツと重みがあつた。

「はい わかりました。」

信治は、うれし泣きしそうな気持ちだつた。だが涙は流れなかつた。

木村の言つた通り、話をして何かが変わつたワケではない。借金が減つたり、克也や寺道が帰つてくるワケでもない。

でも少しだけ、信治の心は軽くなつた。その『少しだけ』が、どれほど大切なもののなか、その時の信治には、まだわかつていなかつたのである。

「今日はお兄ちゃんが来るついで、気合を入れて作ったのよー。」

「わおー豪華なメシーお前、料理の腕上げたんじゃないか?」

「へつへつへー。」

信治は十日の休みを利用して、春奈のいるおじさんの家へ、一泊しに来たのだ。

「うん うまい! 何の料理かよくわからぬけど うまいー。」

「良かった。」

「 とひりで、おじさん遅いね。」

「ああ、今日はなんだか飲み会があるみたいで、帰つてこなーよ。」

「 そりなんだ。」

「 どうかしたの?」

「 ううん どうあえずメシ食つてから話そひ。」

信治はチャンスだと思った。一人きりなら、きっとなんでも話して

くれる。そんな気がしたからである。

「いや、おれもおれもでしたー。」

「片付けちゃうね！」

春奈はそう言つて台所へ行つた。

信治に考える

（どう切り出したらいいものか ってか、何があつたんだろ？男関係か？なら別に首を突つ込む必要もないかも 金の問題とか？ そりや僕だろ。おじさんいるから大丈夫だと思うけどなあ まあ、なん先なけりや、それが一番いい。）

なんて考へてゐるつて、云つてやつぱり仕事も終わつたよつだ。

「終わった終わったつとんで、なんの話？」

「うん
なあ春奈。最近何かあつたか?」

「ん?え
なんも、ないよ。」

信治にはすぐわかつた。ウソをついていると。

「正直に言いな！何があつても怒らないからーなんか悩んでるだろ。俺にはわかるんだからね。」

「誰にも言わない?」

「やめなさい。」

「おじさんもだよ。」

「やめなさい。」

「おじさんには、私もお兄ちゃんも助けられてる。」

「うん。」

「おじさんがないなかつたら、私生きていけなかつたかもしれない。」

「うん。」

「だからね 逆らえなかつた。」

「え?」

「ここになりになるしかなかつたのーー。」

「どうこの事だよ。」

「妊娠した。」

「はー?」

「おじさんの子が、今お腹にいるの……」

と、泣き出す春奈。

信治は予想していた。あらゆる悪い方向で、どんな事を言われても平然としていられるように、予想していたのだ。だが、これは予想外だった。予想以上に悪かったのだ。それでもなんとか冷静に、パニックにならないように、自分の心に言い聞かせ話した。

「それで、春奈は産みたいの？ その子。」

「産みたいわけないじゃん！」

「おじさんは知ってるのか？」

「知らないよ！」

「そうか　　わかった。今すぐここを出よつ。俺のアパートに来ればいい。子供は　かわいそつだけど、おうすか。金はなんとかする！ 心配するな！」

そう言って、信治は妹を抱きしめた。

いつからこんな事に？

何年も前からか？ きっと妊娠しなければ、このまま大学に行くまで耐えるつもりだったのだろう。なぜ気付かなかつた？ なぜもっと早く気付いてやれなかつた！？

信治は自分を責めた。

そしてまた、真っ黒な感情が浮かび上がってくるのを感じたのだった。

次の日。

「ただいまーおひ信治ー元気にしてたか？ あれ？ 春奈は？」

「妹はもうここに来ませんよ。」

「 どうこう事だ？」

「どういう事！？おじさん。それは自分の胸に聞いたらわかるんじやないですか？妹がなぜ、あなたの前から出て行つたのか！？」

「 そうか。聞いたのか。だがよく考えた方がいい。大学に行く金はどうする？お前には払う余裕などないだろ。私にはある。何も聞かなかつた事にして、私に預けとけば全てうまくいくんだぞ。」

「はー？ 何も聞かなかつた事にして！？ 全てつましく！？ ふざけんなよ！？ 妹の、春奈の気持ちはどうなるーあいつが今までどんな気持ちで耐えていたか。どんなに辛かつたか。でもあいつはな！少しもイヤな顔しないでいたんだー兄の俺にすらわからないほど、平然に振る舞つっていたんだぞ！？ それを昨日よつやく吐き出してくれた。今更あなたの所になんか戻せるかよ！？」

「せうか。じゃあ勝手にすればいい。今までの恩も忘れて、金で金で勞して親のよつて勝手に死ねばいい。」

ブチッ！

信治はキレた……

氣付けば、信治はおじさんをボツコボコに殴り倒していく。

「ハー ハー ハー。」

「お前 ゲホッ 訴えてやるがー。」

「勝手にじるー。捕まるのせっかだー。」

「はははは。わかつてないな。私には金と口ネがある。それでもみ消すのは簡単なんだよ。」

「あつやう。好きにすればいいさ。俺はもう失うものなんかいから。」

信治はせうつて玄関に向かった。そして帰り際に、

「おじさん、お世話をなつました。一度と顔も見たくないけどでも、俺はおじさんのこと、本当に尊敬してたんですね わなつなり。」

それだけ言い残して出て行った。

「。」

二人はその後、一度と会うことはなかった。

結局おじさんは、信治を訴えなかつたからである。

さて、どうしたものか

大学資金は とりあえず奨学金で払うとして いや、それじゃ不安
だし、子供をおろす金もいる。 金が必要だ。大金が 。

信治はある決意を固めた。

とても暗く、とても悲しい決意を 。

見慣れた町が姿を変える、この白い季節。
このままで、雪に埋もれて無くなってしまえばいいのに、信治
はそう思っていた。

中絶の費用は信治が払った。ローンカードを使って、ギリギリだつ
た。

そしてわかつ、これ以上借りられない事も、信治は知っている。

「シンちゃん今日は早いね。ご飯まだできていないのよ。」

「あ、今日はご飯いいですよ。あの、ばあちゃんの定期の更新に來
たんですよ。」

「あら、今までそんなのなかつたけどねえ。」

「うん、またに更新しないといけないんですね。証書と印鑑あります
か?あつ、印鑑はコレです。」

信治はあらかじめ調べてきた印鑑のローパーの紙を出すと、佐藤は証
書と印鑑をタンスから持つてきてくれた。佐藤がコツコツ貯めたと
いう、一千万の証書だ。

「じゃあ証書の裏に名前を あとこの用紙にも名前をお願いします。

「

信治はまわりに一枚のある紙を取り出した。それは、解約伝票だつた。

「えー これでいいかい? 歳をとるとよく見えなくて、ダメねえ。」

佐藤は信治の言った通り、証書と用紙一枚に名前を書いた。

「じゃあ印鑑借りますよ。」

信治はその書面でもらった名前の横、一力所に印鑑を押した。

「では、証書預かりますよ。今日までは行きます。」

「あー、もう帰るのかい?」

「うん。」

「次来るのは 来週だね。」

「うん。」

「じゃあ来週は、シンちゃんの好きなカレー作つて待つてるからね。」

「

佐藤はそう言って、ニッコリ笑っていた。

信治はまともに見ることができなかつた。そのあまりにも優しきさ。

信治はまともに見ることができなかつた。そのあまりにも優しきさ。

る顔を。

(ばあちゃん　"じめん　。)

信治は先に支店に戻り、佐藤から預かつた証書の解約手続きを頼んだ。

「これ、現金でお願いします。」

「現金で?」

「はい、なんか 使う用があるついで。頼みますよ。」

普通大口の解約は、通帳に入れたりするものだ。だから

「現金で」と言った信治を木下は、ちょっとだけ不振に思つたのだった。

一千万を手にした信治は、じつそり隣のアパートへ。

「春奈、昨日話した通りだ。この金を持って、一人で暮らすんだぞ。

「

「わあおーよくこんな大金借りれたね。しかも現金でー。」

「そんなのどうでもいいから、さあ、出ていきなー。」

「んー やっぱり、せめて明日にするー。」

「ダメだー。今すぐ出て行かないと、僕が大家さんに追って出されるんだぞー。ほら、早くー。」

「わかった 大学休みの日に、遊びにくるからね。」

春奈は信治のアパートを出て行った。

大学に合格した春奈。

信治は金だけ渡して春奈を遠ざけたのだ。

それはもう、信治が取り返しのない罪を犯したからである。

(一千万あれば、なんとかなるよな もよなら、春奈。)

信治は再び、集金先を歩いた。

そして今日でそれも終わる。信治には、全てを捨てる覚悟はできていた。

(次は 鈴木のおじいさんとこか。こーも、いろいろ教えてくれて

世話になつたなあ。」

「毎度様です！」

「やあ、君か。まあ上がりなさい。」

信治はさつそく仕事を済ませると、こひ尋ねた。

「鈴木さん 今日もなんか教えて下さによ。世界のことわざ。」

「君から訊いてくるとは珍しいな そうだな。ではコレだ。」

鈴木は、いつもならすぐ口に言つてくれるのに、今日はなんだか悩んでいた。まるで、何を言つてあげればいいのか選んでいたよつだつた。

「金きんは鑄はびない。」のことわざの意味がわかるか？

「いいえ。」

「眞の善人は、決して悪人にはならないということだ 私は、君もそうだと思うよ。」

ドキッとした。

本当に全て知つてゐるかのようだつた。
一気に涙がこみ上げてきた。

信治は急いで帰る準備をし、玄関に向かい、靴を履いた。

「もう、次の家に行かないと 鈴木さん。僕は金きんなんかじゃない

です。金なんかじゃ ないですよ お世話をなつましたー。」

信治はそう言って、鈴木の家を飛び出した。

途端、抑えていた涙が溢れた。

理由はわからないが、涙が止まらなかつた。

()「で、最後だな。」

「毎度様でーすー。」

それは保険屋さんの、石田の家だ。

「はーい。」

バタバタと奥から駆けてくる。いつもながら、元気な奥様だ。

「ねえねえ、伊藤さん生命保険に入らない?」

「いや、もつ、いいですよ。」

「もつって もつては別の保険屋で入つたわねーもつ、最近の若い子はこれだもんな。いつも定期とか組んであげてんの。」

「こや、こや、こやわけでは

「どうせ掛け金が安いとか、死亡保険が高いとか言われて作っちゃつたんでしょう。あーあ、うちはもつといい保険あるのに。」

「だから、別にそういうことでは」

「でもね！いくら死亡保険が高いからと言つても、死んだらダメよ！金の為に死ぬなんてのは、絶対ダメだからね！それだけは覚えておくよ。」

「はあ。」

（なんか知らないけど説教されてきた感じだ。まあ タイミング的には合ってるんだけど。でも石田さん。金で命は買えます。そうだ 保険入つとけばよかつた。そしたら春奈にもっと樂させられたのに。）

道を歩きながらそんなことを考えていた、そのときだつた！

信治の目の前に一匹の犬が。その犬は、全身茶色で、右前足だけが黒かつた。

（ あいつ 生きていたのか！ 良かつた 本当に 。）

信治が通り過ぎようとしたとき。

「ワンー・ワンー！」

犬は信治にすり寄つてきたのだ。

「おまえ 覚えててくれたのか？」

「ワンー・ワンー！」

犬はうれしそうにシッポを振り、足に頭をこすりつけてくる。

信治はその頭を撫でてやり、ギュッと抱きしめた。

「ポチ！」

その声に犬は反応し、そっちの方へ走り出した。そこには一人の男の子が。

「 そうか ポチか へつ。簡単な名前つけられたなあ。もう穴に落ちるなよ ポチ。」

金が無くても救われる命はあった。

もう少し もう少し早くそれがわかつていたら、信治がこの先しようとしていることを、変えられたかもしないのに。

いつも通り支店に戻ると、いつも通り仕事を片付け、そしていつもより早く帰り支度を始めた。

「ん？ 信治、もう帰るのか？」

「はい。」

「いいぞ！たまには早く帰つて休め！遊べ！」

木村はそう言つていつものように微笑む。
この笑みに、何度助けられたことか。

「木村係長 お世話になりました。」

信治は職場を後にした。

木村は何か引っかかる感じがしていた。あまりにもキレイに片付いた信治の机。次誰が使うことになつても、いい状態になつている。

信治の最後の言葉。『お世話になりました』この言葉を、木村はどこかで聞いたことがあった。

どうだ？

そうか。

野田が死んだとき、信治が言つていた。
野田が死んだとき 死んだとき？

嫌な予感がした。

「係長！電話です。」

「あつ、ああ、誰からだ？」

「佐藤ですって、女性の方ですよ。」

木村はすぐその電話を取った。

「もしもし、お電話変わりました はい え？信治が
はい、わかりました。こっちで確認してみます。はい
いえ、とんでもない ではそういうことで。はい、どうも。
はい いえ

その電話で、木村の嫌な予感は確信に変わった！

「次長！すいません。私今日はもう帰りますので。」

いつもなら最後の最後まで残つて仕事をしている木村。

「そつか 気をつけて帰れよ。」

次長の永井も不思議に感じたようだったが、別に悪いことでもない
し、毎日遅くまで残つている木村を引き止める理由もなかつた。

木村が風信を出ると、まず隣のアパートを確認した。
信治のいる部屋は電気が消えており、真っ暗だつた。

「おい！信治！いるか？」

ドアを叩いたが、やはり応答がない。

次に木村は携帯電話を手にした。もちろん信治にかける為である。
プルルルル プルルルル プルルルル

やつぱ出ないのか

そう諦めかけていたとき。

「はー。」

信治が電話に出たのだ。

「信治ー今ビビるの?」

「ビビって、いいじゃないですか。」

「さっきな、佐藤さんから電話があつたんだ。」

「そうですか ジャあ全部バレちゃいましたね。もう俺は罪人なんです。信用金庫なんかで、働いてちゃいけないんです。でも、それももうどうでもいい 疲れました。両親に会いに行こうと思います。最後まで、迷惑かけてすいません。」

そこで電話が切れた。

「信治ーおー！ くそー！」

木村は焦った。だが、こんなときこそ落ち着かねば木村は必死に考えた。信治が今どこにいるのかを。

そつこええば電話にせたら風の音が入っていたな

風が強い場所

信治この間 なんて言つてたっけ ？

灯台 ?

そうだ！両親と住んだ家の近くの灯台！そこに違いない！

木村は急いで車に乗りると、スピードを上げて走った！

信治が昔住んでいた家は知っていた。

寺道が、信治とドライブで行ったときのこと、よく話していたからだ。

その近くの灯台と言えば、一つしかなかった。

聞こ合えよ !

冬の海は見ているだけでも凍えそうになる。

灯台がある崖の上も風が強く、それだけで凍りそうだ。

そこに信治はいた。

体はともかく、心は本当に凍ってしまったかのような、そんな冷たい顔で、ただただ真っ暗な海を見ていた。

「父さん 母さん 今そっちに行くな。」

信治が崖の端まで歩み寄った、そのときーー

「信治ーー。」

後ろで大きな声がした。木村だ。

「係長 なんでここにー。？」

「なんでもないのセリフだーなにやっているんだー戻つて来いー！」

「なにって 見た通りですよ。もつさつちへ戻る気もありません。俺は、もう生きる資格が無いんです。」

「どうした？何があつた？ビリして死ななきやならないー！？」

「ばあちゃんから 佐藤さんから聞いたでしょ。俺は、ばあちゃんの一千万の定期を、勝手に解約して、盗んだー。」

「なぜそんなことを。」

「妹の夢は、小学校の先生になること。でも妹は、生まれつき体が弱い。それでも妹は、毎日毎日勉強して、教師になろうと頑張つてた。あとは大学に入れば、その先は大丈夫だと思つてた。大学の資金は、おじさんが出してくれるハズだつた。でもおじさんは裏切つた！これから妹が一人で暮らしていくのに、金が必要だつた！大学資金も必要だつた！でも俺にはそれを助ける余裕なんて無い！どうしても妹の夢は叶えてやりたかった！どうしてもお金が必要だつた！だから俺が犠牲になればそれで妹が幸せになるならそう思つた。俺はもうどうでもいい。人生なんて、メンドクサイことばつかで、もうイヤになつてたから。だから。」

「バカやろう！－誰かの犠牲の上で、人が幸せになんてなれるか！おまえの妹が、そんなので喜ぶとでも思つてるのか！信治人生なんてな、メンドクサイものなんだ。それが人生つてヤツなんだ。でもな、人が生きるのに、資格なんていらないんだぞ！誰にもそんなもの必要ないんだ。生きていくことに意味があるんだ。死んだらダメだ。まだやり直せる。生きてればいくらでもやり直せる。そうだろ？」

「もう、遅い もう遅いよ！－係長 答えが見つかつたら教えてほしいって言つてましたよね。答え、出ましたよ。金より大切なものは無い。」

信治は両手を広げ、暗い海へと飛んだ。

木村は走つたが、間に合わなかつた。

信治の姿は、真つ暗な闇へと落ちていく。

命の炎は大きな渦にのまれ、その輝きを消していったのであつた。

第十話・終わり

「父さん！母さん！待ってよー！」

信治の行く道の先を、信治の父と母が歩いている。
信治は必死について行こうとするのだが、なぜか一人は待ってはくれない。

それどころか、置いていこうとするのだ。

「ねえ！待つてってば！」

信治は走った。が、一向に追いつけそうにない。

急に、誰かが信治の手をとった。
その手は、細く白く美しく、そして暖かい手だった。その手に導かれるまま、信治は両親とは別の道を進んだのである。

「 係長。僕は 」

「助かつたんだよー良かつたなー心配したんだぞ！」

信治は病院のベッドの上にいた。
木村はその横のイスに座っている。

信治はよひやく状況を理解できた。

「 そりゃ助かつちやつたのか 。せっかく覚悟を決めて、飛び降りたつていうのに。」

「 信治！おまえまだそんなことを言つてるのか！おまえを助ける為にどれだけの人が頑張つたと思ってる。おまえをどれだけの人が心配していると思つてるんだ。少しは感謝しろーちつとは喜べー！」

「 だつて 嬉しくても、悲しくても、もう涙が出ないんです。僕の涙は枯れてしまった。きっと、心が死んでしまったんです。」

「 いいか信治。涙が枯れるなんてことは無いー生きているなら、涙は絶対枯れない！おまえの涙も、まだ枯れちゃいなによ。」

「 また生きなきやならないのか メンドクサイな。」

「 またー！メンドクサイとかいうし。メンドーなのはじょりがない。でもな そうだな、例えるなら 車を運転していて、右折か左折しなきやいけないとしよう。本当は右折したいんだけど、車がやたら

来るからなかなかできない。メンバーだから左折してしまえ! となることもある。だけど、どうしても右折しなきやならないときもある。どんなにメンバーでもだ。今のおまえは、右折しなきやならないことやだと思つんだ。」

「。」

「俺はちょうど用があるから、一旦帰るな。冷蔵庫に、適当に飲み物とイチゴが入ってるから、食べるところよ。」

「 ありがとうございます。」

「あと、命も体も問題ないけど、安静にしつかないとこないうから、ゆっくり休め。体も、心もな。」

木村はそう言つて出ていった。

信治はベッドから起き上がり、立とつとした、が。

「うわっ、ダメだ めまいがする。」

すぐベッドに座つてしまつた。

木村が買つてきた、イチゴ一パックを完食した信治。

「 ヒマだ。」

特にする事もなく、ボーッとしていた。

「ンンンン！」

ドアをたたく音がして、ガチャッとドアが開いた。

「おう、伊藤君。大丈夫か？」

柳田支店長だった。

「あつ、支店長 すいません。迷惑をかけて。。」

「別に迷惑ではないぞ。ほら、イチゴ買つてきたからな。」

「イチゴつか。」

「早く回復して復帰してくれないと、支店は人数が少ないんだから。
頼むよ！」

柳田は信治の肩を、ポンと叩いて帰つていった。

「 復帰なんて、できるわけないじゃん。」

あまりにも普通の態度に、信治は戸惑つていた。

しばらくして、「ンンンンーまたノックがした。

今度は、永井次長と、草野だつた。

「伊藤君大丈夫！？」

「なんだか、大変な目にあつたようだな。」

「ええ まあ。」

「まったく、夜中に海で何やつてたんだか。」

「女とでも、会つてたんじやないの？」

「いや 違いますよ。」

「ああ、じつじつじつ。」

「また一次長甘この選んでー。」

「だつて好きなんだもん。」

「病気になつちやいますよー。」

この一人は、ホントに親子のようだ。
聞けばたまたま病院で会つたらしく どこまで気が合つんだか。
さらには、お見舞いに持つてきたものまで一緒にだつた。

「はーイチゴ。」

「なに、草野もかーほら、イチゴ。」

「イチゴ。」

なんだか賑やかな二人。やがて帰つていった。

「でもやっぱおかしいな。自殺しようとした事まで、誰も知らな
いみたいだ 係長が帰つてきたら訊いてみよ。」

自殺はともかく、定期を盗んだのはみんな知っているハズ そう思
つていたが、なにか違つようであった。

次に来たのは立花代理。

「久しぶりだな、伊藤！元気だったか！？いや元気じゃないからこ
こにいるのか。」

「代理は相変わらず元気そうですね。」

「あつたりまえだ！俺はウジウジするのが嫌いなんだ。いつでも
元気さ！今日はたまたま近く通つたから、ちょっと寄つてみた。ほ
ら、田中商店の美味しいイチゴ買つてきてやつたぞ！」

田中商店と病院は、距離的にけつこつ離れている。

（また意味わかんなじようなこと言つてゐる。）

信治はそう思つたが、素直にうれしい気持ちはあった。

「じゃあ帰るからな！なんか困ったことがあつたら電話しろよ！」

と、立花も帰つていった。

その次に来たのは、ショッピングモールで働いている加藤だ。

「イチ、『買つてきたよ！』

（またイチゴ。）

「あれ？ 嫌いだつた？」

「いいえ！ そういうワケでは でも加藤さんが見舞いに来てくれる
なんて ありがとうございます。」

「いいのよー伊藤さんが海に落ちて大変だ！ って聞いたもん。いつかのお礼も兼ねてね。」

「お礼？」

「ほら、アドバイスくれたじゃない。空を見ろ！ って。」

「ああ、はいはい。」

「あれね、意外と効果あるのよ。こんな時こそ空を見ればいいわ。」

「でも、この窓から上見ても、建物しか見えないんすよね。」

「あら、じゃあ代わりの、プラス思考になれる方法を教えてあげるわ！まずね、人は弱気になっちゃいけないのよ。無理やりでも前向きに考えないと。そのためには、ちくしじょう！負けるか！ふざけんな！って気持ちを、常に持つておくこと。これが私のめげない方法よ。」

「はあ。」

「なんか暗い顔してるから。どうせ彼女にでもつられたんだろうけど、そんなの、伊藤さんらしくないわよ。じゃね。」

加藤はササッと帰ってしまった。

「負けるか ってか。」

だが加藤が残した言葉は、信治の胸の中に確かに何かを残していったのだった。

コンコン！

「はーい。」

扉を開けて入ってきたのは、ガソリンスタンドの事務の川岸だった。

(「げつ！なんで川岸さんが ？？？」)

「伊藤さん、何やつてるの？もひ、伊藤さんが来れなくなつたら誰が両替とかしてくれるのよ？」

「す、すいません。」

「まつたく いつやつて文句言える相手がないと、つまらないのよね。早く良くなつて仕事なに戻るのよ。」

川岸はそれだけ言つて帰つていった。

お見舞い品も、ちゃんと置いていつてくれたのだった。

(「げつ やつぱりイチゴだ でも、川岸さんって 意外といい人かも。」)

「ンンンンー

「はいはーいー」

「シンちゃん生きてるかー？」

「あつ、あの 大丈夫ですか？」

それは木下と川村の「ンンビ」だった。

(また賑やかそなのが来たなあ。)

「伊藤さん」「、イチ」「、買つてきたんですね。良かつたら食べて下さい。」

「イ、チ、」「…？」

信治の意外な反応に川村はビックリ…

「あああああ、」「メン」「ナサイ！イチ」「嫌いでしたか？」

「いや、いやいやいや、」「メン」「メン。今ちょっとイチ」「恐怖症で
わ あ り が と う。あとで頂くよ。」

「良かつたです。」

今度は満面の笑みの川村。

「ホント優奈ちゃんはわかりやすいなあ ほら、訊いとけ訊いとけ。」

「

木下が、なにやら余計なアドバイスをしている。

「あ、あの。」

「なつ、なんでしょう。」

「伊藤さんの体調が心配なんで、メールアドレスとか教えてもらひつ
てもいいでしようか。」

「うーん、いいんだけどさ。ほら、僕海に落ちたもんと、ケイ
タイ壊れちゃつたんだよね。」

ガーン!!

川村はガックリ肩を落とした。

「 よし、じゃあ今度ケイタイ買つたら、真っ先に川村さんに番号教えるから! 」

「 ホントですか!? ありがと! 」 やれこまかー。」

満面の笑みの川村。

（ホント、わかりやすい人だわ 。 ）

それは、さすがの木下も呆れる程だった。

やがて一人も帰つていった。

夕方。いつの間にか、冷蔵庫の中はイチゴでいっぱい。冷蔵庫の上までイチゴだらけになつていた。

「 にしても、もうちょっとバリエーション増やせよなー。全部イチゴつじギーゅー! 」 とー! ?

信治もつこつこシッコンでしまつた。

「コンコンー！」

「入るぞ。」

そう言って木村が帰ってきた。

「どうした？変な顔して。」

「だって、見てくださいよ。イチゴ、イチゴ、イチゴ。みんなイチゴしか持つてこないんですよ？」

「ハハハ、でも良かつたな。」

「何がですか？」

「信治、表情が明るくなつたよ。」

「あつ。」

信治も自分で気付かぬうちに、暗い気持ちが消えていくことに気が付いた。

「ここにあるイチゴの数だけ、信治を心配して来てくれた人がいたつてことだ。きっと、誰も金なんか関係なしに来たんだろうな。」

「。」

「信治。ホントは自分でも気付いているんじやないか？金より大切ななんて、世の中いっぱいあるんだって！」

「。」

「用があるって言って出て行ったが、実はある人を迎えて行ったんだ。」

「誰ですか？」

「どうしても信治に会いたいって、その人にだけは、信治がしたこと、本当のことを全部話してあるからな。佐藤さん、どうがー！」

ドクン！

急に鼓動が高まった。

その瞬間、信治は全てがスローモーションに見えた。ゆっくりドアが開き、その人の姿が見えた。

そこには、信治が本当のおばあちゃんのようになっていた、佐藤がいた。

佐藤はいつもよつやかな笑顔ではなかった。

だが、定期を盗まれ怒っている顔でもなかった。

「シンちゃん！」

佐藤は元々の足でかけよつてきた。

そして信治を、ギュッと、強く抱きしめたのだった。

信治は泣いた。

全身をふるわせて泣いた。

今まで貯めていた分を一気に解放したかのように、いつまでも泣き続けた。

「ほらな信治。涙は枯れていなかつただろ？心は死んでいなかつただろ？なら生きなきやな！どんなにメンドーでも、いくら辛くても、生きなきやな！信治！」

「 は うつう ま 。 」

その後、信治は風信を辞めた。

周りは許してくれたが、信治の中では許されないことだった。

今信治は、割と給料が高いバイトを見つけ、働いている。

風信は辞めたが、川村は信治と連絡を取り合っている。

時期、付き合うことになりそうだ。

佐藤は、一千万の金は信治にあげたのだと張った。いくら信治が返すと言つても聞かない。いつしか信治も、しぶしぶ承諾するようになつていた。

代わりと言つてはなんだが、信治は今、佐藤と一緒に暮らしている。

夜の浜辺で仰向けになり、信治は空を見ていた。
星がキレイな夜だ。

「七海さん あのとき僕の手をひいて助けてくれたのは、あなたですよね。初めて七海さんに触れました。暖かい手だった。ありがとう。金より大切なものの、見つかりましたよ。言葉じゃうまく言えないので それは確かにあった。僕は借金だらけで、これからも金に苦しむと思う。でも、負けない。金なんかに、絶対負けないからな！！」

そこに、七海の姿は無い。

でも代わりに、空には他のどの星よりも輝く、一番星がいた。

それは、静かに、優しく、信治を見つめているような気がした。

『金より大切なものの』それは結局なんなのか。答えは人それぞれ違うだろう。

数ある答えの中に、『愛』もあると私は思う。

そうではない！

金が一番だ！

と言つ人もいるかも知れない

では、例え話をしよう

もし、あなたの子供が産まれたとして

あなたにソックリな、メチャクチャかわいい子供が産まれたとして

あなたがその子の人生の道を、次の二つから選ぶとしたら

(1) お金にはかなり恵まれるが、人に愛されない人生

(2) お金にとても苦労するが、たくさんの人々に愛される人生

あなたはどういう選びますか？

第十話・終わり（後書き）

あなたにとつての『金より大切なものの』は何ですか？
ご意見をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102f/>

金より大切なもの

2010年10月10日14時38分発行